

45周年記念誌

むつぼし



静岡点訳奉仕の会

静岡点訳奉仕の会創立45周年記念誌

むつぼし

目 次

第1部 静岡点訳奉仕の会関係	1
1) 祝 辞 (静岡盲学校 伊藤律夫校長)	2
2) 挨拶 (静岡点訳奉仕の会 松原幸男会長)	3
3) 静岡点訳奉仕の会の活動及び周辺の状況の推移	5
4) 寄稿	8
・ 静岡県点字図書館より	8
(静岡点字図書館職員 熊谷成子氏)	
・ 米国の視覚障害者の現況	10
(カンザス大学講師 望月千雅子氏)	
・ 静岡点訳奉仕の会45周年記念に寄せて	12
(静岡盲学校 元職員 入川勝男氏)	
・ 現会員からの投稿	16
・ 記念誌「むつぼし」バックナンバーより	22
5) 静岡点訳奉仕の会 会員名簿	31
6) 県視覚障害者関連ボランティア一覧	32
第2部 静岡盲学校関係	35
1) 静岡盲学校110年の年譜	36
・ 特集1「廣楽寺縁起と時代背景」	40
・ 特集2「静岡市を訪れたヘレン・ケラー女史」	49
2) 写真、図などに見る静岡盲学校の歩み	56
3) 静岡盲学校の発展に尽くした人達	65
・ 特別寄稿「小田信樹との出会い」米山昌央	75
4) 静岡盲学校の作品	82
・ 全国高校生作文コンクール最優秀総理大臣賞受賞作品	
・ 盲学校の歌 (応援歌、石川先生頌徳歌、児童劇歌)	
付録	
・ 会員の点訳図書 (BES形式)	
・ 昭和45年度 静岡盲学校卒業式 (音声記録 MP3形式)	

第 1 部 静岡点訳奉仕の会関係



平成 19 年度
点訳奉仕の会総会にて

(1) 祝 辞

45周年をお祝いして

静岡県立静岡盲学校長 伊藤 律夫

静岡点訳奉仕の会が、発足45周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。この長い年月、会長様始め会員の皆様が、本校児童生徒のために点訳図書、拡大図書、録音図書作りに御奉仕いただきましたことに、深く感謝申し上げます。

私は本校に着任した際、図書室の書架に並ぶ点訳奉仕の会の皆様からの多数の寄贈図書の存在を教えられ、強い感動を胸にいたしました。その後は、学校視察等で来校された方々に私が説明をすると、作成者のお名前が記された一冊ずつを手に取りながらの感嘆の声を聞くことになりました。

また、本校教員が点訳奉仕の会の活動へ参加することにより、専門性の向上と継承の機会となっていることについても、本校に止まらず、本県の特別支援教育の頼もしい後ろ盾となっただいただいています。

さて、私は静岡盲学校の校歌が大好きです。文語の格調とメロディの親しみやすさを感じます。2番の歌詞「まなこには見えね 六星にふるる心の小琴 広くさやかに分け入らん ふみの林に」を初めて聞いた時、私はかつて訪れた中国西安の「碑林(ひりん)博物館」を思い出しました。古代からの文字が刻まれた石碑が、林のごとく立ち並んでいることから「碑林」と呼ばれています。その庭で、誰でも聞いたことがある論語の文章など、さまざまな刻字に指を触れながら「ふみの林」に深く分け入りました。

ところで、図書室はまさに「ふみの林」であると思います。点訳、拡大、録音と形態は異なっても、石に文字を刻むに等しい地道な作業によって作成された「道標(児童生徒の可能性への道案内)」が、来訪者を待っています。

しかし、さらにはその図書に触れて反応する「心の小琴」を、児童生徒に抱いてもらうことが必要です。クラスでの読み聞かせ、ボランティアの皆さんによる「お話の会」や「対面朗読」、点訳などのリクエスト等により、図書に親しむ機会を増やして、貸し出し冊数も増加はしています。けれども、「広くさやかに分け入らん」とする興味・関心の喚起に向けて、学校はなお一層の努力を重ねていくべきであると考えます。

静岡盲学校も平成20年度、創立110周年を迎えます。この本校の歴史の半分近くの年数を、奉仕の会の皆様に支えられてまいりました。どうぞ、今後とも貴い御支援をいただけますようお願い申し上げますとともに、奉仕の会のますますの御発展を祈念いたします。

(2) 会長挨拶

「静岡点訳奉仕の会」の今までとこれから

静岡点訳奉仕の会 会長 松原幸男

45周年を迎えるにあたり過去の活動を振り返りながらこれからの本会の方向を会員皆様とご一緒に考えていけたらと思い記します。

本会への入会は在学していた高校に点訳の同好会を作りたく、昭和38年頃静岡盲学校を訪れたことがきっかけでした。何回か訪問するうちに会の仕事にも携わるようになり現在まで役員としてお手伝いさせていただいている訳です。

発会から10年間は学校の教室、音楽室などをお借りしての点訳講習会開催や生徒さんたちとの護国神社へのレクリエーションや校庭での盲人野球などが思い出に残っております。

「毎朝1時間ほど拡大書写をしないと1日が始まらない」、「点訳を完成させ読み返したところ間違いに気づき何十ページも打ち直した。」という苦労話を聞いたのもこの頃です。

昭和44年の活動報告に日曜日の10時より点字講習会、受講者24名、初、中級の2グループに分けて実施、午後は役員による製本作業とか、決算書には録音テープ10巻(ソニー5形)とありオープンリール形のテープを使用していたのがわかります。

20年目までは録音部の活動が記憶に残っております。毎月のようにNHKのアナウンサーに講師をお願いして実施しました。静岡なまりの注意を受け繰り返し発声、発音の練習をしたものです。この頃は拡大部の役員でした。

昭和49年には拡大図書製作のために平塚盲学校にて研修を受け翌年からは実績が出てきました。「静岡盲学校点訳奉仕の会」から今の「静岡点訳奉仕の会」に改称したのもこの年です。

30周年の記念式を実施するまでが本会が一番活発に活動した時期でした。パソコン点訳こそ始まっていませんが点訳、録音、拡大の三部門のバランスが取れていた時期でした。

40年目までの10年間は新たなパソコン部の発足がトピックスと言えます。これまでの手作業に近い点訳から訂正、追加作業が簡単に出来ますし、複数の人が分担して点訳したものをあとで一つの点訳書への編集が可能です。又、利用者の立場からは今まで図書館に出向くか郵送による点訳図書を一瞬にして遠く離れた場所からも利用できる魔法の機械です。これからは益々パソコンでの可能性が広まるでしょう。

今後の「静岡点訳奉仕の会」の行き方には問題点もあります。

事務局を盲学校に置いている関係もあり先生方にご負担をかけてもいます。又、会員の減少や拡大・録音活動の低迷、役員の固定化などをいかに解決してゆくかも問題です。

「すぐやる点訳、拡大」など要求に即時対応する事業や、多くの人たちへの図書作りから個々のニーズに合わせた「オーダーメイドの図書作り」や授業の進行に合わせた教科書の副読本等の図書作りなどがこれからの本会の方向を示しているように思えます。

創立45周年を迎えるに当たり会員の皆様と共にこれらの問題の解決方法を考えて行きたいものです。



(3) 静岡点訳奉仕の会の活動及び周辺の状況の推移

年度	制作図書数					会報		盲学校、周辺団体等
	会員数	点訳	録音	拡大	点訳 ピッチ	会報	摘要	
昭和38	59					1・2	静岡県立静岡盲学校 点訳奉仕の会結成総会(6/23)	身障者更生指導所の点字図書、 盲人ホームに移動
39	59	29				3・4	宮城島英子氏会長に就任	
40	68	39	37			5～7	(録音はオープンリール型) 点訳図書製本開始	
41	68	69	14			8～10	・静盲生徒との親睦会(ハレ-) ・会員バッチ製作	
42	114	79	12			11・12	田中ちえ氏新会長就任	
43	114	39	8			13	製本の一部を外部に委託	
44	71	54				14・15	製本は全面的に外部委託	静岡県点字図書館設置
45	71	48	3			16・17	薬大六点会との交歓会(9/5)	静点、通信教育で点訳奉仕員の 養成開始
46	65	88	1			18	土屋氏の寄付金による 土屋文庫設置(3/10)	・静岡県点訳者連絡協議会発足 (昭和54年頃まで継続)
47	65	85				19・20	簡易点字器購入頒布開始	静点、録音図書奉仕員養成開始
48	50	48				記念誌 むつぼし	・録音はカセット型に移行 ・創立10周年記念行事実施	静盲高等部本科募集停止
49	50	72	11				・平塚盲で拡大図書製作研修 ・静岡点訳奉仕の会と改称	
50	50	47	37	120		21	拡大製本は原則外部委託	
51	99	52	31	149		22	ライトプレーヤー10台購入	
52	99	71	15	227			静岡県ボランティア協会加入	・静点、移動点字図書館開始 ・静盲高等部本科専攻科生 漸次卒業し在籍者皆無となる
53	106	85	43	226			特殊教育100年記念 全国特殊教育振興大会で 感謝状を受ける	
54	106	90	40	185		むつぼし	創立15周年記念	
55	102	83	78	136			・NHKアナウンサーを講師とし、 録音講習会開始(昭和62年 まで40回実施) ・奉仕者懇談会(11/23)	
56	102	69	116	65		23～25	明社協加入(昭和57年まで)	
57	113	87	74	53		26・27	読売光と愛の事業団から 「福祉活動奨励賞」を受ける	静点、点訳奉仕養成講習会を 開始(通信指導は中止)
58	94	85	85	42		28 むつぼし	創立20周年記念行事 (会場は県総合福祉会館6F)	静点、県総合福祉会館に移転
59	95	73	45	76				
60	95	66	44	18				
61	95	68	8	27				
62	93	86	64	44			拡大交流会参加 (昭和63年まで)	
63	87	34	19	25				・静点「てんやく広場」加入 ・IBMがパソコン点訳システムを 全国点字図書館他に配布

年度	本会関係						盲学校、周辺団体等	
	会員数	製作図書数				会報		摘要
		点訳	録音	拡大	点訳 パソコン			
平成元	83	32	23	33				
2	74	36	9	22		・静岡女性の会参加 ・点字拡大研修会(平成5年まで)	パソコン点訳の主流は無量寺 点字出版所の「BASE」	
3	70	41	1	50				
4	70	47		28			盲学校点字情報ネットワーク 開設(パソコン通信)	
5	69	54		38	むつぼし	創立30周年記念行事 (場所:視聴覚センター)	Windows3.1の開発でMS-DOS からWindowsへの移行始まる	
6	58	44		47			「盲学校点字情報ネットワーク事 業」で、IBMがパソコン一式を全国 盲学校に寄贈	
7	56	54	22	54	54	・厚生大臣より功労賞受賞 ・パソコン点訳の開始		
8	55	65	18	33	15	静岡県ボランティアグループ活 動奨励賞受賞	静点、パソコン点訳図書を蔵書 として受け入れ開始	
9	58	45		24	15	松原幸男氏新会長就任		
10	53	40		24	61	静岡盲学校創立百周年記念式典 にて表彰される	・静岡盲学校創立百周年記念 行事挙行 ・Windows98発売開始	
11	55	43		17	81		静点、Daisy録音図書貸出開始	
12	61	33	9	6	77		静点、プレクストーク貸出開始	
13	73	39	40	11	100		・「総合ないーぶネット」開始 ・WindowsXP 発売	
14	63	21	22		50		盲学校点字情報ネットワークが インターネットシステム化	
15	53	62	5		44	むつぼし 創立40周年記念行事実施 記念式は静岡盲学校講堂	盲学校点字情報ネットワークが 視覚障害教育情報ネットワークに 更新される	
16	56	13			76			
17	56	6		2	27	(パソコン点訳の数を巻数から 原本冊数に改める)		
18	56	11	2	1	47			
19	54					会員研修用ノートパソコン3台購入		
20						むつぼし 45周年記念行事実施(予定)		

点訳奉仕の会 創立30周年記念行事にて

(会場：静岡市視聴覚センター)



前列左より三重野、 榊原、 松原、 押尾(校内)、
後列左より土橋、田中(当時会長)、田代、笠原(校内)、高橋(盲学校事務)
の各氏。

創立40周年記念行事にて

会員、盲学校関係者、参加諸団体の方々とともに
(会場：静岡盲学校体育館)

円内写真は同記念講演会での様子



(4) 寄稿

今回の記念誌「むつぼし」発行にあたり、静岡点訳奉仕の会とゆかりの深い皆様、会員の皆様に原稿をお寄せいただきました。掲載させていただきました皆様、誠にありがとうございます。

静岡県点字図書館より

静岡県点字図書館 熊谷 成子

おはようございます

点字図書館の朝は早い。始業は8時30分、開館は9時だが、8時前後にはもう誰かが部屋の鍵を開けている。電気のスイッチをいれ、窓のブラインドをあげ、コピー機、パソコンを立ち上げ、メールをチェック。今週が〆切の新刊目録のデータを大急ぎで整理。貸出の電話が鳴り始める前の少しの静寂。と思う間に「おはようございます」の明るい声。録音室に向かうボランティアさんだ。4つの録音室は一日3交代。朝は8時半から11時半。次が11時半から2時。最後が2時から5時まで。一日に12人が録音に通ってくる。図書館入口にあるパソコンで各自の外付けハードのウィルスチェックを行った後、録音室にはいってゆく。3年前(平17)から始まったパソコン録音。当初はどうなることかと気をもんだが、案ずるより産むが易し。パソコンのパの字も知らなかった年輩のボランティアさんも今ではみごとに使いこなしている。

「食べながらのアクセントは？」本日最初の質問。静岡は東京に近いとは言え、かなり独特のアクセントがある。「食べる」「生きる」など、共通語アクセントでは中高の動詞が頭高になる。加えて「ながら」という接続助詞が付くと・・・前夜アクセント辞典と格闘していた姿が彷彿される。

質問に対応する横で電話が鳴る。書庫でデイジー図書を配架していた職員が飛んでくる。受話器を手に再度、書庫へ走る。数分後、右手に受話器、左手に点字図書を抱きかかえて戻ってくる。その受話器を机に置くや否やまたリーン。

「おはよう。土日に読む物がなくなって困ったよ」その気持ち、よーくわかります。本が手許にない時の何とも言えない頼りなさ。さぞ落ち着かない土日を過ごされたことと同感し、早速本選び。「時代小説がいいな。でも権力争いはもう沢山。人情物で何かないか。忍者も登場すればもっといい。」

「ないぶネット」で検索する。本一冊とっても、希望は十人十色。かつては冊子体の目録相手に悪戦苦闘したが、今は「ないぶネット」が強い味方。全国の点字図書館や視覚障害者サービスをしている公共図書館など約170団体が加盟しているインターネット経由のデータベースだ。蓄積されているデータは何と約39万件。「ないぶネット」のおかげで他館の資料を捜すことがとても迅速になった。みつけた資料をオンラインリクエストすれば、早ければ翌日こちらに届く。

「おはようございます。」点字のボランティアさんの声。点訳作業室は10時から始まる。月曜から金曜まで毎日10名以上が訪れ、点訳図書の校正、編物点訳の打ち合わせ等々大忙しだ。今日は教科書点訳の大詰め。土日もなくパソコンに向かっていたらしい様子がうかがえる。

重なるようにまた「おはようございます。」今度はデジ編集のボランティアさん。デジ編集も10時から始まる。録音室の横のスタジオで4時までこちらもパソコンに張り付いて原本と照合しつつ、ページ付け、階層付けなど編集作業をこなしていく。最近ではデジ図書の利用が圧倒的に多い。貸出数は、平成17年にデジ図書がテープ図書をぬいた。昨年（平18）の統計ではテープ図書が5905タイトル、デジ図書が10313タイトル。ちなみに点字図書は1607タイトルだった。過去に製作したテープのデジタル化を求める声も多く、新規製作と共に遡及テープのデジ化にもあたっている。

「おはようございます。」かわいい声と共にゾロゾロゾロと子どもたち。教科書に点字についてのるようになって、小学生の見学が増えた。昨年1年間で34件290人の見学があったが、殆どが小学生だ。先生に連れられて興味津々の顔で辺りを見回す。「本がない」「図書館じゃないみたい」そう。点字図書館は図書館という名がついているものの一見、事務室、あるいは宅配便の発送所の感。各々感想をもらしつつ、書庫で点字の児童書を手取る。「ズッコケ三人組知ってる。」「この点字少し読める。学校で習った。」頼もしい子どもたち。「ねえ、世界中で目の見えない人は何人いますか」おっと、これは難しい質問。写真をとって、メモをして、点字表記のついた地球儀をもちあげて・・・先生に促されて、お給食の待っている学校へ帰っていく。壁の時計はもう12時を回った。

米国の視覚障害者の現況

アメリカの視覚障害者団体 NFB に関して

望月 千雅子

(アメリカ カンザス大学講師)

“Merry Christmas!”

The National Federation of the Blind; (NFB) Douglas County Chapter のクリスマスパーティーに出席していた人々の声が会場いっぱいに響き渡った。2007年12月15日カンザス州ローレンス市にある老人ホームの一室で、NFB Douglas County Chapter のクリスマスパーティーが和やかな雰囲気の中、開かれていた。出席者は筆者を含めおよそ7名、決して多くの人数ではないが、楽しいアットホーム的なパーティーを開くには十分な人数である。

NFBは1940年代半ばに盲人の自立・職業開拓・教育開拓・アメリカ個々の盲人の人権の主張を訴えるために結成された会で、今日約15,000名以上の視力障害者や晴眼者がメンバーとして入会している。筆者も今年の4月にメンバーとしてNFBのDouglas County支部に入会した。この支部は昨年九月に結成されたばかりのまだ新しい支部だ。

NFBはその本拠地を首都のWashington DCに構え、各州に支部を設けている。また各州ごとに小さな支部がいくつかあり、Douglas County Chapterもその一つである。

NFBの大まかなミッションは「個々の盲人に自立と人権を」であり、その目的を達成するために、多くの試みを行なっている。

特に筆者が今回注目したのは「盲児の教育」である。ここに記すまでもなく、カンザス大学で現在アジア史を学ぶ筆者は、結婚もしていないし子供もいない。しかし、Graduate Teaching Assistantとして同大学でアジア史の基本コースを教えている筆者は、このごろ高等教育以前の教育、基本教育がいかに大切なものであるかを、いやと言うほど思い知らされている。これから成長して行く視力障害児の基本教育は、晴眼児の基本教育と同様、おそらくそれ以上に大事なものだと思っている。

日本では普通、視力障害児の教育は盲学校、あるいは障害者自立支援センター等が率先して行なっていくようであるが、アメリカではNFBのような障害者団体が州の教育委員会、または各学校と協力して盲児教育に関与しているようである。Douglas County支部にも視力障害のお子さんを持つ晴眼者の方がメンバーとして入会しておられる。年

に一度 NFB は全国総会と州の支部の総会を持つが、両方の総会では必ず「視力障害児を持つ両親のため」の会合が持たれている。その会合で視力障害児の教育方針や意見交換等が行なわれるようである。特に「点字学習の重要性」には重点を置いている。NFB は今年のクリスマスに合わせて、視力障害児たちにサンタ・クロースに点字の手紙を書くことを薦めたりもしている！

Douglas Country 支部の部長リンダ・カナディー氏は「CD・テープ・コンピュータ等の普及によって点字を学ぶ児童が少なくなっているのが今の現状です。しかし NFB は『点字の読み書きは盲人の基本』と考えています。」と力強く筆者に語ってくださった。

日本と同様に障害児の普通校入学が法的に許可されているので、NFB は普通校に点訳ボランティアの常駐の必要性を強く訴えている。教師たちが出題する試験問題や宿題のプリント等を点訳し、盲児の生徒が晴眼者の生徒たちと同等の情報、あるいは教育材料を得ることが出来るようにするためである。盲児への教育上の配慮は残念ながら全国同列ではない。州によって異なるようだ。筆者が 20 年ほど前にウィスコンシン州のマジソン市の普通高校に入学した際、学校側の盲人の生徒に対する配慮の良さに驚いたことを今でもはっきり憶えている。教師たちがクラス内で配るプリントや試験問題・宿題のプリント等は予め点訳されて私に渡されたことを記憶している。後日分かったことは、このような配慮がどの州の普通校でも同じように成されているとは限らない、ということである。現にカナディー氏によるとカンザス州の普通校（ローレンス市の学校を含め）の盲人の生徒に対する教育上の配慮は決して良いとは言えず、これからの改革を見なければならぬ、ということである。NFB が将来ずっと取り組んで行く課題の一つではないだろうか。

2007 年のクリスマスも終わり、きっとサンタ・クロースもほっと一息ついているのではないか。盲児たちがサンタ・クロースに宛てて書いた点字の手紙を整理してレターボックスにしまいながら、来年のクリスマスには今年よりもっと多い点字の手紙を期待して、一人そっとほほえむサンタ・クロースの姿を筆者は思い浮かべずにはいられない。

（編集者注：筆者は静岡盲学校中学部卒業生）

静岡点訳奉仕の会 45 周年記念に寄せて

元静岡盲学校職員
入川 勝男

発会 45 周年まことにおめでとうございます。長い間の地道な御活動に対し、当時の静岡盲の職員として、又点字、点字書の利用者の一人として厚く御礼申し上げます。

会の発足当時の昭和 30 年代を振り返りますと敗戦後の混乱期を脱した日本社会が、大きく発展を遂げようとしている時でありました。障害者や、とりまく人達の教育や福祉の向上、充実に対する活発な活動期でもありましたし、今日の礎となっていることは言うまでもありません。皆様の感慨も一入かと察せられます。

私が終戦後間もなく外地から引揚げ、京都の盲学校で鍼灸を教わりました。一時、全盲になった時に覚えた点字の指読みが今日まで大いに役立っています。その後静岡盲学校でお世話になり、退職後東京の日本盲人会連合で、主として点字図書館の業務に携わりました。この時期、点訳ボランティアの皆さんのいきいきした姿がその後の私の生き方の上で大きな柱となっております。京都の長岡京市に移住して、京都ライトハウスの点字図書館の点訳ボランティアを 10 年させていただきました。現在は自適の生活をしております。自適とは束縛されずに心のままに楽しむということから、私にとって、好みの本を朗読 拡大読書機で、まことにたどたどしいのですが 録音し、再生しながら点字タイプで点訳を楽しむという次第です。最近の点訳は H・G・ウェルズの『世界史概観』を 2 年ほどかけてこの春に終え、現在は斉藤 孝著『声を出して読みたい日本語』と取り組んでいます。ところで私には一つのこだわりがあります。即ち、これはと思う漢字・難読語・忘れてしまっている漢字・固有名詞などを訳注書きします。たとえば島崎藤村の千曲川旅情の歌の中の『...緑なす 繁莖(はこべ)は萌えず、若草も藉(し)くによしなし...』という一節で、この辺は暗唱もしており、又仮名が振ってありますが、この“はこべ” “しく”という漢字は単独では読み書きできないのです。そこで はこべ(漢字 2 字 くさかんむりにしげる・はんものはん、くさかんむりに ろう・ろうは こめ・おんなの旧字、しくは くさかんむりにらいへん、つくりはむかし)と書いてみました。

自分用に私流に書くので気楽です。

最近の点字毎日には、漢字に関する解説記事がよく載るようになりました。大阪府立盲学校の川上先生（故人）が考案された漢点字の普及で漢字に親しむ人もふえているようです。また中途失明者にとって漢字は未練があり執着するには当然といえます。仮に『漢字を楽しむ』とか『漢字アラカルト』などのタイトルで点字の小冊子ができたら！と思ったりしますが言うは易く...で作るのは容易ではなさそうですし、点字に不慣れな中途失明者にはなかなか抵抗がありそうに思えます。漢点字利用者にはやはり漢点字が一番？でしょうか。知らない私は立入る資格はなさそうです。長くなりましたがもう一言お許し願います。

私は朝日新聞の『天声人語』は毎日読むことにしています。以前点訳していたことがありました。あの時オヤ！と思ったものを保存してありますのでお目に掛けたいと思います。私は書くのに苦労した覚えがないので書かなかったと思います。点訳に不向きと言ってしまっはミもフタもありません。音読した通りに書くかできるだけ解説を加えて点訳するかのどちらかで、読み手に任せるとのことですね。話題になれば幸いです。

どうも失礼致しました。皆様の御健勝と今後の御活躍をお祈りいたします。

<昭和55年5月12日 朝日新聞「天声人語」より>

日墨関係、という新聞の見出しをみてとっさにはわからなかった人も多かったろう。メキシコの漢字表記は墨西哥である。墨はその略語だ。外国名を漢字で表す時、わざわざ難しい字を使うことには異論があるだろう。洪牙利、蘇丹、委内瑞拉、という国名をハンガリー、スーダン、ベネズエラと読める人はそうはいない。しかし、外国名を米、英、仏、と略語で表すのは、日米首脳会談、日仏友好、といったいい方をする時に便利だし、「アメリカとソ連の関係」を「米ソ関係」といえば、十字が四字ですむ。私たちはもっと知恵をしばって、わかりやすい漢字表記と略語の約束ごとを工夫すべきではないか。

亜米利加（米）加奈舵（加）伊太利（伊）印度（印）などの例は先人の遺産だが、インドネシア、ビルマ、スリランカ、ニュージーランドといったアジア太平洋諸国について、適当な表記がないのは片手落ちのような気がする。

「日本・インドネシア関係」などと書くたびに、いい漢字表記があればと思う。昔の人はホノルルを花瑠々と書き、スエズを末州と書いた。それに倣えばアフリカの新生国ジンバブエを神馬笛、ニュージーランドを乳慈蘭土と書けば、その国の感じがでていような気がする（むろん、表記の原則がカタカナであることに変わりはない、念のため）

漢字には表情がある。たとえば外国の政治家名では、西独のシュミット氏は「趣味人」でもいいが、カーター大統領を「苛垂駄垂」としては失礼だろう。

同じブレジネフ書記長も、侮礼辞子怖と豊麗慈根夫とでは、受ける感じが違う。インドのガンジー首相も頑尼猪と丸尼衣とでは別人の感じになる。国名の漢字を選ぶ時はだから、いい感じの漢字が必要だ。

ついでに、横文字の事件名も、時々漢字になおした方がいい。K D D事件は怪異泥泥事件、ロッキ - ド疑獄は狼苦奇異奴疑獄、とした方が迫力がある。

サミット会議を詐満徒会議、としたら第三世界にはうけるだろう。

<昭和55年8月3日 朝日新聞「天声人語」より>

「粉装」と書いたら「扮装」の間違いだろう、という投書をたくさんいただいた。「臭覚」と書いたときも「嗅覚」が正しいという投書があった。扮、嗅（きゅう）のような当用漢字表にない漢字を含む語の書きかえには苦労するが、好き勝手に書きかえているわけではない。

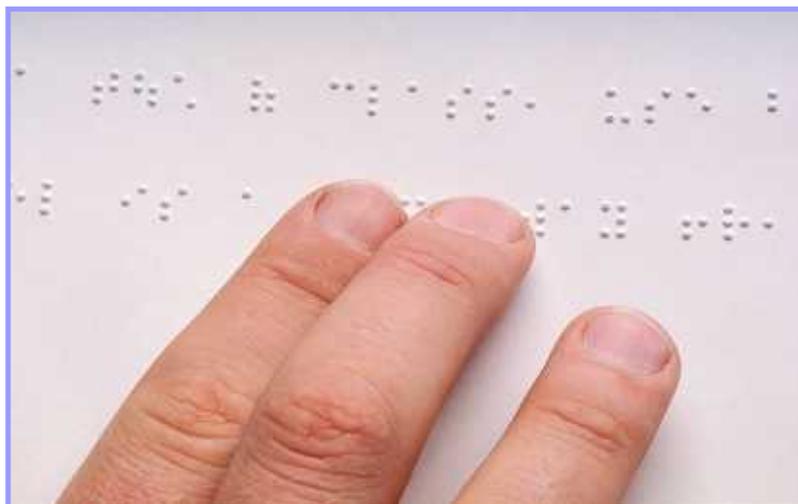
根拠は、国語審議会がきめた「同音の漢字による書きかえ」や日本新聞協会のとりきめだ。臭覚のようなばあいは、文部省がきめた学術用語彙によっている。新聞は原則として当用漢字を使うという趣旨で、聯合 - 連合、理窟 - 理屈、義捐金 - 義援金、反撥 - 反発、禁錮 - 禁固、気魄 - 気迫、醇朴 - 純朴といった書きかえをしており、すでに定着したものも多い。ただ、どうもなじめないという書きかえがあれば、これは検討の対象にしなければならない。というわけで、粉装、臭覚は誤用ではないが、考えてみれば私たちの仕事は誤用とのたたかいだ。うっかりすると 汚名ばん回 古式豊かに まんまと失敗 風下にもおけぬ 国民の意志にそっぽを向けた発想 犯罪をおかす 草木もなびくウシミツ

時、といった珍妙な表現をしてしまう。

ことばの問題では常に慎重派、悪くいえば石頭、進歩派、悪くいえば軽薄派がいて、石頭と軽薄派の主張がぶつかりあって均衡を保っている。どちらが欠けても、日本語はみがかれないし、生き生きとしたものにならない。

ひところ、若者の間で、話はピーマン（中身がからっぽ）話はストロー（つつぬけ）といった表現がはやった。日本語の破壊である、とマユをひそめる人もいたが、このていどの言葉の遊びは昔からあった。

酒飲みを「左利き」という。昔、鉱山で働く人が右手にツチ 左手にノミを持ったことから、ノミ手 - 飲み手 - 左利きのだじゃれが生まれたそう。ケリがつく、ケリをつけるのあのケリは和歌の最後につく「なりけり」のけりだ。軽薄派の遺産である。 - のヒント。 名誉 古式ゆかしく まんまと成功 風上
背を向ける 罪をおかす 草木も眠る。



温古知新 シャール バルビエの3点点字

笠原 昭男

現在世界的に用いられているルイ ブライユの6点点字は、画期的な発明であるが、この構成の原理を日本語に適用し、更に種々の変更を加えたこともあり、日本点字は同型文字多点文字が頻出し、蝕読には難易度を増大させることとなった。当初から盲学校に入学した場合は、現行の点字を何の苦もなく蝕読してしまうが、中途失明者が実用的な速度で点字を読めるようになるケースは極めて少ない。

シャール バルビエはフランスの軍人で、あとにパリ盲学校でも教鞭をとっている。またルイ ブライユの先生でもある。彼こそが世界初の点字の発明者であり、点字器の開発者でもある。

触覚による文字は古くからいろいろと考案され、速度は遅くとも読み取れるものではあったが、視覚を使わずにこれを書く、または作るということは非常に難かしいものがあった。シャール バルビエは板に溝を刻むという工夫で点字器を創作し、視覚障害者に文字が書ける能力を与え大きな福音をもたらしたのである。

シャール バルビエは以下に紹介する3点点字の他、11点点字、12点点字、楽譜点字を創案しているが、原理は全て同じで、基本となる行、列より構成される文字表を1字にまとめ、点で形を作った。各種類は形の表し方の相違いにより分化したものである。

11点点字とか12点点字は縦2列で、行の位置、段(列)の位置の順を点の数で表した単純な構成である。下の表のsの場合なら4行目、6列目にあるから、左の縦列に4個、右の縦列に6個の点を配置して表す。12点点字は、後に行を1列追加したものだが、既存の表の内容も一部順序を変えたので、利用者は大いに戸惑ったことだろう。また11点点字では1字に11点も使うものがあるので、蝕読もかなり苦労したと思われる。

楽譜点字以外は視覚障害者のために作られたものでなく、闇のなかで前線の兵士に命令を伝えるためのものであったらしい。バルビエは11点点字を「夜間文字」、3点点字を「野戦病院の文字」と呼んでいた。「野戦病院」とは銃弾の飛び交う前線の背後にあって、負傷した兵士を看護する病院である。突然失明した軍人にとっては、11点点字の判読は困難を極めたので、単純な形態の点字のニーズがあり、考案されたものかもしれない。

バルビエの点字は今では歴史上の遺物となり、一般には忘れ去られているが、全ての文字を僅か3点で表したのであるから、蝕読の容易さの上でも大いに参考になるものである。

まず数符の表のように、1から6までの数を2点で示す工夫をした。5と6は現在の点字器では正しく書けないが、どのような方針で作られたかは不明である。

一字を構成するには、まず行の位置を書き、次に列の位置を書く。このままだと全て4点になってしまうが、行の数符の後の点、列の数符の最初の点になるようにして、3点としたのである。

文字表を調べると、1文字以外に音節(シラブル)も含んでいるが、アルファベットで欠けている文字がある。「c」「h」「w」「y」がそれらである。フランス語の基本のアルファベットは「w」を欠いた25字であり、「w」が抜けているのは納得が出来るが、他の文字については不可解である。後年のブライユの点字は25字揃っているのに、この間にフランス語で大きな変革があったのかもしれない。

このようなことから、現行の日本文字をローマ字式で表したとしても、この3点点字は使えない。ただし原理の一部は利用できよう。

例えば折角ブライユの点字があるのだから、これを利用してみる。50音表の縦は「ア」から「オ」までの5行、横は「ア」から「ワ」までの10列ある。10は0で代用する。行の位置は瞬時に分かると思うが、さもないと長く発声すれば分かる。列は使っていれば即、分かるようになるだろう。例えば「ツ」は3行、4列目だから数符は抜いて3,4と書けば良い。これで50音は1,2,4,5の僅か4点のいずれかで全てが表せるのである。ならば「ン」、促音、濁音、半濁音、拗音等々どうするのかという疑問が生じよう。それは工夫次第でなんとかなると思うが、この平成の現代にこんな案が通るのは万に一つもないだろうから、更なる言及は止めておきたい。

余談になるが、この一文は「點字發達史(復刊本)を参考に使っているのだが、当時、点字の知識の無い製版者が原稿をかなりデフォルメしたので、かなり不正確な点字になっている。今回、この原稿を書くに当たり、原理にほぼ忠実に作り直してみた。なので、この記事を読まれる方は、本邦で初めて真のバルビエ3点点字に接することになるのかもしれない。ただし、各字がすべて同一の空間を占有して書かれたかは分からない。今では6点点字が全て同一領域を占めていることに疑問を持つ人はいないが、過去には、「1点でも6点でも同一領域を占め不経済である」と主張する学者もいたのである。

シャルル バルビエの3点点字

数 符					
1	2	3	4	5	6
● ●	● ●	● ● ●	● ●	● ●	● ● ●

	1	2	3	4	5	6
1	a ● ● ●	e ● ● ●	è ● ● ●	i ● ● ●	o ● ● ●	u ● ● ●
2	eu ● ● ●	ou ● ● ●	an ● ● ●	in ● ● ●	on ● ● ●	un ● ● ●
3	b ● ● ●	d ● ● ●	f ● ● ●	g ● ● ●	j ● ● ●	l ● ● ●
4	m ● ● ●	n ● ● ●	p ● ● ●	q ● ● ●	r ● ● ●	s ● ● ●
5	t ● ● ●	v ● ● ●	x ● ● ●	z ● ● ●	ch ● ● ●	gn ● ● ●



「点字」と共に歩んだ年月

土橋 敦子
(アイボランティア沼津木星会)

昭和44年の秋でした。私達主婦ばかり7人は「点字」を習う為、沼津盲学校へ出かけました。「虹のグループ」と名づけ、その数年前から地域の子供会やPTAの行事等、意欲的に活動していました。或る時「点字」の話題で盛り上がり、ついに「点字」の勉強をグループとしてとりくむことになりました。

はじめて盲学校の門をくぐり、木造校舎の奥の図書室で点字板を前にして、皆おっかなびっくりはじめたのでした。勉強する事に喜びを感じながら毎週1回、2ヶ月間続けてゆきました。そしてその後も佐治先生にずっと御世話になりながら、それでもなんとか沼盲の点字本作りにもとりくめるようになってゆきました。

ところが、その後になって県東部地域は点字活動が立ち後れているのを知りました。又、その差の大きいのに愕然としました。これは何とかしたい、仲間を増やしたいと思いました。そして沼盲や点連協(静岡県点訳者連絡協議会)の御力ぞえにより、講習会を開催することになったのです。西も東もわからない私達でした。皆さんの御力をかりなければ、何も出来ないのです。

そうして「静岡点訳奉仕の会」には事ある毎に出かけて来ては、いつも助けていただいて来ました。

拡大図書講習会の準備の際には田村みつ子先生にお願いして、静盲も夏休み中だったのですが特別に御指導いただいたのです。暑い暑い日で顔から流れる汗がポタポタと机の上におちる程でした。それでも先生は終始笑顔で接して下さり私達を励まして下さるのでした。その時の事を思うにつけても、田村先生の御逝去は何としても悲しく淋しく胸が一ぱいになります。

「創立40周年記念」の時には車いすで御祝いに出席して下さいました。あの時の全員での写真がせめてもの記念となりました。又私達グループも今は二人となり、私も80才をすぎました。

けれどもお蔭様で年毎にボランティア仲間も増えつづけて居ります。活動の幅もずいぶんひろがりました。しみじみうれしく有難く思っています。それもこれも、いつもやさしく暖かく見守り導いて下さった「静岡点訳奉仕の会」の皆様の御蔭です。

本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

「静岡点訳奉仕の会」がますます発展されるよう御祈りいたします。

アイボランティア沼津木星会紹介

会 員 数 61人

発 足 昭和44年

連 絡 先 Tel 055-922-3996(露木)

会 員 募 集 随 時

杉崎町母親の会が点訳を始めたのが母体で、新会員の募集をする講習会を主催、又は応援して録音と拡大図書を製作するグループを結成しました。視覚障害者からの様々な要望に応えられる窓口として沼津木星会を作り、今年で39年目になります。現在、点訳は3グループ、拡大は2グループ、録音は1グループで構成され、家庭で作成した図書を図書館とボランティアビューローで編集しています。コツコツとさらにじっくりと点訳や拡大や録音をしてくださるボランティアさんを歓迎します。

<木星会だより 第42号より 2007年5月13日 撮影>



静岡点訳奉仕の会創立四十五周年の思い

大木 美智子

最初に盲学校へ伺ったのは、拡大図書の作成の講習の時でした。田中会長さんが「皆さん、夜の時間が楽しくなりますよ。」

と、おっしゃったのがまるできのうの事のように思い出されます。ずっと前には、総会の時に家から自転車で約一時間かけて盲学校迄行きました。ある年、雨の日でしたが途中でパンクしてしまい、カップを着て自転車を引いて歩いてきたのが最近の事のように思われますが、ずい分長い年月が経ったものです。楽しかったのは、NHKのアナウンサーから朗読というよりも、音訳の勉強をさせていただいた事です。一冊の本を録音図書として完成させることの難しさ。自分の声で作った録音図書を誰か聞いてくれる喜びを胸に夢中でがんばった日々など思い出はつきません。

もちろん年と共に体調のよくない日が多くなってきて、思うようにいかず困るようになりそろそろ引退をと思っていた処へ、孫の為に何もかもすてて横浜へ行っていましたが、それからもう四年が経ち、ようやく私がいなくても大丈夫になりました。過労の為字を書けなくなってしまったのが、何とか少しずつ書けるようになって喜んでいくところですよ。

最近盲学校の先生方が大勢お手伝い下さいますので、きっとこの会もいつまでも続いていく事と思います。

田村先生もお亡くなりになったと聞きました。小学生と元気に過ごしていらして「課題図書を録音して下さい。」

と、爽やかに言われた時の幸せをしみじみと感じています。

これからも絶えることなく静岡点訳奉仕の会が続いていきますよう願っております。



以下は、過去の「むつぼし」に掲載された投稿の一部です。先輩方の思いと会の長い歴史を改めてお感じいただければ幸いです。

15周年記念誌より

ふ れ あ い

奥野 百合子

娘時代から健康に恵まれ、それが、自慢の軀と、神経とが、脆くも崩れ去ったその時から、希望も、自信もそして意欲も無くし、加えて、老母の発病、病床の看護から、野辺送りと、なんとも暗く、佗しい日々が過ぎ、独り部室の片隅で見るともなくつけたテレビの字幕に吸い寄せられたのが、私と拡大図書との出会いの日でした。

山国の子供達が、生き生きと鮮かに描かれる雨の日文庫の「三太物語」から始まり、短編の傑作、洒落た会話の、「O・ヘンリ短編集」。伊藤左千夫の名作、「野菊の墓」のお民。戦場に散って行った、多くの若者達の、厳しくて、哀しい青春の証しのような「雲の墓標」。

何気無く、読み過ごしていた古典かなづかいと、現代かなづかい。むずかしい漢字語の読みと書き方。

髪に白いものが増す今頃になり、戸惑いながらも写すことの苦しみが楽しさにも移って行くことを、知り得ましたが、自分のその秘かな、喜びがそれを読む学校の皆さん方に、どんな風に伝わっているのか不安です。

原本と、拡大されたものとの違いの受けとめ方。原本を損わぬ、内容の読み方が果して出来るものか。少しずつ写し溜めて行く過程での、心の動きの、日に依り、変化してしまう文字の乱れ。原本に応わしい文字が書けたら、どんなに素晴らしいことかと、一方的な考え方をしております。

多くの方々が、苦しみの折り与えて下さった諸々の恵を、何かの形でお返しでき、お役に立てたらという細やかな希いから始まったこの奉仕が寧ろ今、私への励ましと健康の尺度となってくれています。

幾日もかかって、やがて、私の手元を離れ先生方を始め、関係者の皆様の御苦労によって一人前の拡大図書に生まれかわり、盲学校の書棚に納まっている、まだ見ぬさまざまの本を、折りがあったら尋ね、手に取り、重さと、暖かさを、そっと味わってみたいと想っております。

私の近況

海野 保三

最近ボケ老人の事がやかましくなってきた。本人はともかく家族にとってやり切れない事であろう。なぜボケルのであろうかと自分なりに考えて見ました。一家のガマ口を握っている時はまず大丈夫なのに責任の少ない隠居の立場で無為に過す様になると出て来るらしい。

画家、歌人、学者等のボケタと言う事は余り聞かない。事実は異っているかも知れないが？ とにかく頭を使う事がボケない事に違っているのかも知れない。先日寿講座の先生もなるべく多く新聞を読み書いて下さいと話された。頭をつかえと言う事だろう。私も年齢的にはボツボツ入口に入って来た様だ。高洲公民館講座の日本画と俳句の会に頭をつつ込むことにした。日本画は美しいが余り細かに書上るので眼に自信が無いので簡単と見られる水墨画の方にしてみた。只今基本画練習中やはり大変である。とにかく筆の勢のよいのが生命らしいので自分の画が見られる様になるには三、四年かかるだろう。水墨画は色が少なく淋しい。基本が少し分って来たし下手を誤魔化して筆の勢の無いので、見よくする為に日本画をまねて色を使い水彩画も混入してえたいの知れないものを書き上げて一人楽しんで見ようと考えている。

先生の眼から見たら邪道かも知れないがボケ対策として画いているので我慢して頂くことにする。

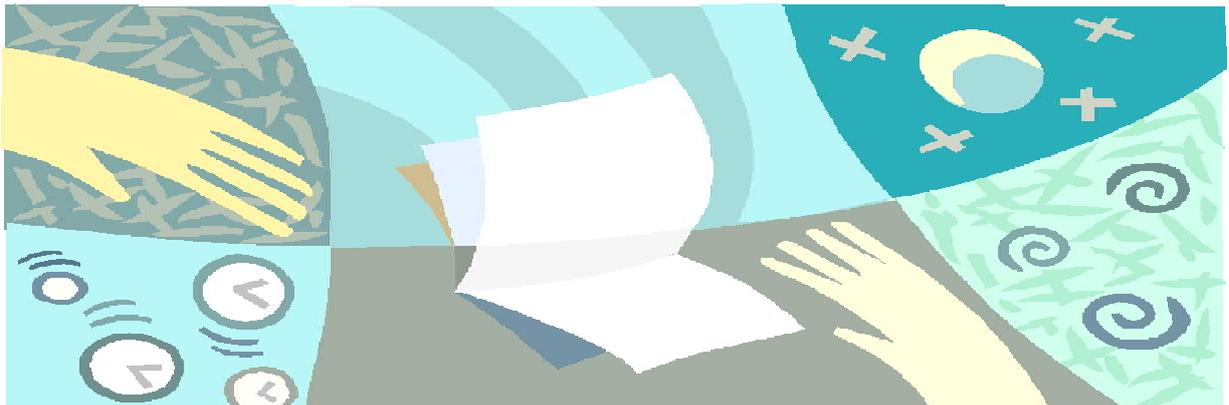
俳句も大変だ、季語季語にしばられて手も足も出ない。先月青嵐と言う題を頂いた。辞典で調べて見ると「せいせいとする、山の気である」と言う。又外には「夏緑の林や草原を吹き渡る風」とある。何んとか作って見たが実感が無い。先日ハイキングに行った処を思い出して半日ばかりで出かけて見た。自転車で一時間で山ろくまで四十五分山道を登って「段の平地蔵尊」とかいう山中の淋しい地蔵様のある所へ行く。旧山越への村道かも知れない。汗を流して休む時の風の味を膚に感じて帰ってきた。之で何んとかなりそうだ。そしてもう一つボケ防止となっているのが点訳だ。起き抜けに頭と目の澄んでいる間に五頁の点訳をノルマとしてやっている。

朝出来ない日など午后暇を見つけて取りかゝるが眼がトロンとして来て何にが何にやら結局破る様な事になってしまう。でもお蔭で一ヶ月に一本の割合でここ

一、二年は出来そうだ。

今迄点訳の種本には困った。面白くてよい本をと心掛けて見たが案外無い。今年に入って孫のしている本からヒントを得て新作童話の文庫本で探すことにしている。仲々大人が見ても面白いものがある。値段も五百円以下とあっては都合がよい。佐藤さとり氏の本など大変面白い、只今打っている全集が十二巻講談社から出ていると聞いて問合せ見たら一冊一千二百円で十二巻全部で一万二千元。これでは一寸小遣の方が承知してくれないので願い下げにした。でも講談社其他の低学年用の文庫本は有難い。単価が低い上に一冊で一ヶ月又は三ヶ月も使用出来る。出来るだけ面白そうなのを買求めている。最近一寸どう言うものかなと考えている事がある。私は紙を点字板の巾に合せて最初から折って来た。折曲器とも言うべきものも造ったがその寸法にした所が最近打返した巾が寸法より大部広く角度も正しくないので最初の一枠にかかってしまうので最近は一枠丈逃げて打っている。表面はよいのだが裏面になると最後の枠なので時々打込み過ぎてしまう。防止策としてあれやこれやとやって見たすえに今のやり方におさまった。点字板の金具の板木に丈夫な紙の帯を付けて、その中に裏面の時丈八ガキ程度の紙を切った止め金に差し込むと最後の枠が隠れる様になって無事通過出来る。取ったり入れたり面倒ではあるがまずまず成功の部と言えそうだ。但し自分のやり方がよいとしての事ではある。間違っているのなら折曲器の方から直さなければならぬ。簡単な木工製品ではあるが現在の生活では直せなくなって来ている。

折曲器に書込まれた製作日を読んで見たら、昭和四十四年六月三十日としてある。大部旧の事である。よくいやにならずについて来たものと思う。然し長い間にもかゝらずへたくそである事を考えると恥しいと考えている。下手なりになるべく続けますがよろしく。



奉仕会30年 あれこれ

田村 みつ子

ついこの間、発足20周年記念のむつぼしが発行されたばかりという思いなのですが、早くも30周年の記念行事ということで、あらためて感慨深いものを感じております。

時間の流れは本当にとどまるどころなく、私たち自身と私たちの周りを次々と変えていきますが、その中に在って、この会がここまで活動を積み重ね、スタートの時点の目的に向かって、今なお、又更にこれからも、その役割を担って行こうとしていることに、大きな意義を感じざるを得ません。初代会長の白鳥英子先生（旧姓宮城島先生）を始めとして、昭和42年以降は現田中ち系会長さんを中心として、30年間に在職された12名の校長先生方、役員の方々の御力、そして何よりも会の主役である点訳、拡大、録音の各奉仕者のお一人おひとりの活動は、ずっしりと重みのあるものであり、そこに込められた善意と努力は本当に貴いものだと思います。又、それらを活用して育ち巣立って行った静岡盲学校の生徒たちにとって、図書室のこの宝は、大きな働きをしたものと信じざるを得ません。会の発足時より、昭和55年度まで18年間、校内役員として関わり、又、昭和63年度まで静盲の小学部教員として在職した私にとって、この会の活動には思い出深いものが多々ございます。30周年の節目に当たって、思い出のいくつかを記し、発足の頃からの会員の方々にはその頃のことを思い起こすきっかけとして頂き、新しい方々には、現在の活動の後ろに積み重ねられたものとしてお読み頂ければうれしいです。

<点訳奉仕の申し出と奉仕者の組織化>

昭和30年代の初めから、極く少数の方が個人的に点訳奉仕をしていらしたことは聞いておりましたが、半ば頃からは、その希望者が毎週のように、土曜日の午後など学校に見えられたり、電話での問い合わせなどが増えてきました。点字の図書作りということで、校務分掌の図書係りで対応、土曜日の午後や日曜日の日直の時などに来校頂き、点字板、点字用紙を準備、一対一で、50音のはじめからお教えしたことが何回かありました。しかし、希望者が増えるに従い、個人的な

指導では対応しきれなくなり、奉仕者の組織化、グループ作りを学校にもお願いし、図書係りの職員が世話係りとしてその準備に当たることになりました。

当時、図書係りの主任でいらした、既に故人となられました須田先生と私で計画書を書いたことを憶えております。学校側の職員と、校外からの奉仕希望者で、若い方々、数人にも協力をお願いし、準備委員をかためました。(この方々が現在までの役員ほとんどです。本当にご苦労様。)当時の校長先生、故兼松先生の理解を頂き、PTA 会計から、500円の助成金を頂いたのが、この会の会計のスタートでした。準備委員会は日曜日の午前中からとか、ウィークデイの夜など、校長室や職員室で開かれ、30年前の現役員の目はキラキラ輝いて、毎回全員出席、会の結成に向けて、熱っぽい話し合いがなされました。

<奉仕会結成総会開催>

何回かの準備委員会の後、昭和38年6月23日(日)、静岡盲学校体育館で開かれ、30名余りの方々の出席者がありました。お互いに初めてのこと故、今思えば手探りの状態で会を進め、校長挨拶、今までの経過説明、規約成立、役員選出、自己紹介等々、何とか形ができて、全員つつましく、新しい出発を心におぼえて意欲を燃やしました。当時は、現在のようなマスコミの取材などまだありませんでしたから、地味なスタートでしたが、そのことが現在まで続けられた力のもの一つになっているのかも知れないと思わせられます。

結成総会終了後も、早速役員会を開き、活動計画、名簿作り、会報作り等についての具体的な作業の分担を決めました。この日、当時新幹線開通に伴う柚木の地下道工事のやかましい機械の音が木造校舎にひびき、日本の高度成長が着々とすすめられた時代を表していました。このことが妙に記憶に残っております。

<奉仕者養成の講習会、通信講座のことなど>

たしか点字を習得して頂くために、先ず点字講習会を開きました。講習会は日曜日に学校で、はじめのうちは、名簿にのっている方々や、口コミで私もおぼえたいという方々が出席され、落ち着いた雰囲気を受講されましたが、そのうち、講習会の案内をテレビやラジオで放送して頂くようになってからは、いつも予想以上の受講者があり、多めに準備した机、椅子が足りず、学校中走り回って、机や椅子を運んで間に合わせたこと、又、同様に点字板の数も足りず、寄宿舍にいる児童生徒(当時は日曜日でも殆どの舎生は帰宅していませんでした。)から借

り集めた苦勞は忘れられません。うれしい悲鳴。又、録音講習会では、NHK 静岡支局のアナウンサーに講師をお願いし、何回か開きましたが、(第1回は昭和44年度)発声、発音の基本から、内容豊かなテキストに沿って指導をして頂きました。

拡大図書講習会は昭和49年度から開かれましたが、第1回から受講者数多く、旧校舎の音楽室に溢れんばかりの方々が集まりました。拡大図書作りには、個人で奉仕して下さる方の他、市内の小学校のお母さんたちで組織する家庭教育学級でも取り上げられ、皆さんが共同で何冊かを作って下さったこともあり、これらの講習会は、放課後や夜、各小学校へ講師として出張して行われました。

現在、点訳、拡大、録音の各部門でベテランとして活動している大村楠さん、夏目文江さん、深沢政子さん、大木美智子さんをはじめ、その他の方々の皆さんは、みなそれらの講習会を受けて努力なされた方々で、本当に頭が下がります。

さて、講習会につづいて、点訳も拡大も通信講座を受けて頂きましたが、どちらも同意文や正解の回答文作りには、役員たちが、集まり、頭をひねって勉強させられました。特に、点字文のマスあけについては、かなり苦勞した思い出があります。その点、拡大の方は、原文に忠実にということで、はっきりしているので、助かりました。点字通信講座の添削をしていて、ある時、こんなことがありました。私が担当した受講者の中の一人の方に、最初の「読み方」の問題文を送り、そのお返事が戻ってきたのですが、点字文によみがなは書き込んで下さってあるものの、全然文になってないのです。少し読んでから文の終わりのあとに、「いくら考えて読んでも、文の意味がわかりませんでした。」と書いてあり、これは、「読み方」の点字文の紙を上下反対にして、読みがなをつけて下さったものでした。よみ方の点字同意文には、上部にペンで「読み方」とかとかいつも書いて問題文を送っていたのですが、どうした間違いか、この時うっかり記入が洩れていたのを送ってしまったようで、私の手落ち、本当に申し訳なかったと、あとでお詫びの一文を送ったものでした。それにしても始めから最後まで、何とか読みがなを書こうと、不思議に思いながらも書いて送って下さった熱意に敬服した次第でした。盲学校の児童たちは、よくふざけて点字の反対読みと称して、読む字を書く字のように左右の行を反対に読み、歌も反対に歌ったりするのですが、上下の反対読みはこの時が初めてでした。

<ある年の総会のこと>

毎年総会は、古い校舎時代は体育館に椅子を並べて行われました。ある年、その時校内の役員でいらした長身の土屋先生が、その前年の1年間の会員の奉仕の実績を、見える形で会場に並べましようと言って下さり、図書室に納められていた点訳図書、拡大図書、録音テープを体育館まで何往復かして運んで下さったことがありました。毎年の総会資料には、奉仕で出来上がった図書やテープの書名、奉仕者名などは掲載したのですが、その実物を見ていただき、奉仕いただいた会員の方々への感謝を込めた報告にしたいとの発想からでした。古い木造校舎を御存知の方にはおわかりいただけますが、当時図書室は、体育館から最も遠い位置の2階にあり、図書等を持って運ぶ距離としては、大変なものでしたが、先頭に立ってその労をとって下さった先生の若さと熱意は今も忘れません。もちろん出席なさった会員の方々には、立派に製本された点訳、拡大図書を見ていただき、喜びと次への意欲をもっていただくことができました。

<盲学校生徒・児童との交流>

点訳図書、拡大図書、録音テープなどは、図書室の棚に配架され、児童生徒たちに積極的に利用されましたが、製作者と利用者との間をつなぐパイプの役割を果たすものとして、総会の第二部や、秋の奉仕者懇談会が交流の場となりました。児童からの奉仕者へのお礼の言葉や、生徒の読書感想文の発表のほか、琴、バイオリン演奏、歌の発表など、時には父兄の方も参加されて、和やかなひとときを持ちました。

又、低学年の茶目っ気たっぷりの児童が、お礼の言葉の中で点訳図書の点字の間違いを指摘するなど、こちらもヒヤヒヤした場面もありました。一度だけでしたが、晩秋の晴天に、校外の空気を吸いましようとして、近くの護国神社の境内を会場として懇談会をもったことがあり、報告や話し合いのあと、共々にゲームやフォークダンスに興じ、お互いの交流を深めたものでした。これらを通して、中には点訳者と児童と個々のつながりが生まれ、点訳してほしい本、拡大、録音してほしい本の希望が出されたりしてお願いしたこともありました。

この他、学校行事の運動会、学習発表会の案内を、会員の方々にも発送、日頃の子供たちの活動の成果を参観していただいたことも何回かあり、盲学校への親しみと理解をもって、いただきました。

<静岡ライオンズクラブとのつながり>

奉仕会の活動は、各部門の奉仕者が主体となって歩んで参りましたが、直接奉仕活動できないが、と、経済的な面で会を支えて下さった団体や個人の方の力も忘れることはできません。中でも、静岡ライオンズクラブからは、田中ちえ会長さんの御紹介もあって、この会の歩みについて、折にふれ励ましや援助をいただきました。私が校内役員をしておりました期間内だけでも、たしか3回あるいはそれ以上の機会に、製本器、テープレコーダー、点字タイプライター等々の寄贈の他、用紙代、製本代にと多額の寄付をいただきました。そんなことで、その折々には、小学部1年生の児童代表を引率、贈呈式に出席、ライオンズの皆さんに点字というものを知っていただくために、児童の点字の読み書きの実践を見ていただいたり、今は亡き当時の教頭、清水先生の作られた「点字さん」のかわいい歌を発表したりして、お礼申し上げたことなどなつかしく思い出します。その時、連れて行った児童の一人、旧姓赤沢典子さんが、この30周年記念行事の講演会の講師として御自分の生活体験を発表して下さるとは、何とも嬉しいことです。

<高校生、玄関に溢れる>

昭和40年代に入ると、市内の高校にも、「点訳クラブ」「点字クラブ」などが生まれ、点字講習会や総会にも高校生の制服姿が見られるようになりました。そこで、毎年秋の高校文化祭のシーズンに入ると、各校のクラブ発表の点字に必要な点字板、点字タイプライターなどの器具の他、点訳図書、盲学校児童生徒の作品、等々の借用に来校する高校生の一群が、放課後の玄関に溢れることが度々ありました。時には、2校以上の高校生が鉢合わせすることもあり、これらの受け付け窓口も奉仕会の役割でしたので、秋になると、この対応にてんやわんやでした。でも若い人たちに、盲学校や点字のことを知っていただくのは嬉しいことと思い、夢中でした。この時、学校側として、前述の清水教頭先生が大きな応援をして下さったことは忘れられません。又、この頃、県立薬大の中にも「六点会」という名称でグループが生まれ、さすが、大学生ということで、メンバーのリーダーが卒業しても次の世代への引継ぎがスムーズになされ、点訳作業はずっと続けられました。又、「六点会」の方々と、静岡盲高等部（本科）生との交流ということで、土曜日の午後、自由参加という形で、臨濟寺、洞慶院などへ文学散歩を

試みたことも3回ほどあり、同じ若い世代の悩みや、文学の話などを通して深い交わりのひとときを持ちました。

<会員相互の交流・いろいろな人たちとの出会い>

毎年の総会や、奉仕者懇談会などで、お互いに顔を合わせたり、総会資料その他で他の方の御名前を読みおぼえたり、又、橋田憲司副会長さんの編集、印刷による「会報」の内容を通して、長い年月の間に、お互いの心の中に理解し合い通じ合うものが生まれたことと思います。会報は年に3回、2回、あるいは1回と発行されましたが、公務超多忙な橋田副会長さんの労には深く感謝するばかりです。

この会の3部門の奉仕は、一緒に集まって活動するという性格のものではなく、志をもった方々が、それぞれの生活の場の中で、その時間を作り点筆を握ったり、点字タイプライターのキーをたたいたり、又、ラッシュンペンを走らせたり、深夜周りが静かになってから録音のマイクを持ったりの作業ですので、まったくの自由な、ある意味では孤独な活動です。それだけに真剣に取り組んでいらっしゃる方々の気持ちの貴さを思わせられます。又、何年か続けていらっしゃる方々の多くが、「毎日、点字板やタイプの前に座らないと一日が始まらないのです。」とか「楽しみながらやっているのです。」などとおっしゃって喜んでやって下さっている姿が、他の会員を励まし、活動の原動力となっていると思います。私自身、会に直接関わっていた時、会員の皆さんの誠実な活動がどれほど私を支え、活動を推進する大きな力のもとになっていたかを今、はっきりとおぼえさせられているのですから…。

30年、ふり返れば、多くの方々との出会いの数々が思い起こされます。中には、既に故人となられた方も10人近くを数えます。ただなつかしいというだけでなく、それらの方々が会を支え、私も又支えられてきたことに、この場を借りて心からの御礼を申し上げたいと思います。

そして、今後の在り方については、これを機会に、もう一度見直しをし、時代の動きに対応、学校の実情に即応した会としての、更なる成長と発展とを願わずにはおられません。徒らに駄文を綴りましたが、30周年を喜び、感謝を込めてペンをおきたいと思います。

(平成5年8月)

(5) 静岡点訳奉仕の会 会員名簿

平成19年度

[点訳部]

氏 名	
1	田中 ちえ
2	伊藤 裕美子
3	櫻井 秀雄
4	白川 香
5	土橋 敦子
6	南口 澄子
7	中野 文子
8	前原 照代
9	山本 敬子

[拡大部]

氏 名	
1	海野 紀美江
2	石川 春菜
3	横山 成実
4	花井 千鈴

[録音部]

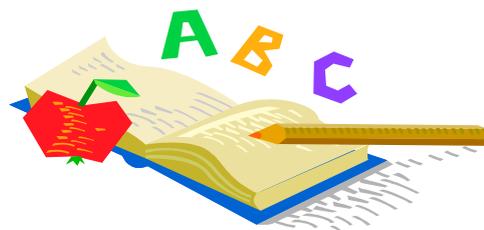
氏名	
1	大木 美智子

[パソコン部]

氏 名	
1	伊藤 舞美
2	今村 真弓
3	提坂 まさえ
4	高柳 迪子
5	伴野 富子
6	法月 寿子
7	瀧井 久江
8	布施 郁子
9	堀江 美希代
10	光武 松子
11	岩本 令二
12	加藤 ルミ
13	釜下 晃
14	稲垣 鈴江
15	渡辺 恵美子
16	八木 利恵
17	富山 真澄
18	前田 慶子
19	深津 あけみ

[役 員]

役 職		氏 名
1	会長 点訳	松原 幸男
2	副会長 拡大	松岡 悟
3	副会長(学校長)	伊藤 律夫
4	監事 点訳	橋田 憲司
5	会計 点訳	秋本 啓子
6	監事 拡大	榊原 淳一
7	パソコン部	笠原 昭男
8	録音部	大木 美智子
9	事務局	上村 英昭
10	"	馬場 俊一
11	"	村木 明広
12	"	久田 まり子
13	"	内記 優子
14	"	渡邊 大志
15	"	田中 夏美
16	"	今村 光宏
17	"	小林 考美



(6) 静岡県視覚障害者対象ボランティア一覧

中部地区

名 称	地区	活動内容	代表者	連絡先
せせらぎの会	静岡市清水区	点訳	坂入 慶子	054-388-3341
ふれんど	静岡市清水区	対面朗読 録音	田代 葦江	054-369-5151
清水点訳グループ「あかつき」	静岡市清水区	点訳	高林 秀幸	0545-85-2759
ばそぴあ清水(パソコン点訳)	静岡市清水区	パソコン点訳	山本のぶ子	054-364-8001
点訳グループたんぽぽ	静岡市	点訳	島村 博章	054-285-8573
静岡点訳奉仕の会	静岡市	点訳 拡大 録音	松原 幸男	054-283-7200
点訳クラブ、モーゼル	静岡市	パソコン点訳	稲垣 鈴江	054-246-2408
ガイドグループアイ	静岡市	ガイドヘルプ	實石 ぬえ	054-262-7779
静岡市立中央図書館音訳ボランティア 中央ひびきの会	静岡市	録音図書	秋山 紀恵	054-247-6742
静岡市立西奈図書館音訳ボランティア 西奈ひびきの会	静岡市	録音図書 対面朗読	中川矢枝子	054-265-2556
静岡市立長田図書館音訳ボランティア ひびきの会	静岡市	音訳	高田 範江	054-258-0188
静岡市立図書館音訳ボランティア 南部ひびきの会	静岡市	音訳	稲垣 洋子	054-237-2464
虹の会	静岡市	朗読	伊藤 真子	054-252-4913
しおざい録音奉仕グループ	焼津市	音訳	吉井 啓子	054-624-0086
点字サークル「六星会」	焼津市	点訳	近藤 年雄	054-627-9683
点字サークル焼津たんぽぽ	焼津市	点訳 代筆 音読介助	萩原 初江	054-628-1762
ピッコラ	藤枝市	点訳	杉山とし子	054-641-8886
点訳サークルひまわり	藤枝市	点訳	和田 周子	054-635-8757
サークル ウィズ・ユー	藤枝市	ガイドヘルプ	井村 富枝	054-643-7986
明るい社会づくり運動島田地区協議会	島田市	ガイドヘルプ	清水 明充	0547-38-0428
声のボランティアともしび島田	島田市	音訳	鈴木 晴江	0547-36-0384
金谷ブレイル	島田市(金谷)	点訳	前島 和子	0547-46-3480
あじさいの会	富士川町	朗読	望月 鮎子	0545-85-3648
ほうたる	大井川町	音訳	富弥 悦子	054-622-3493
星のくに	吉田町	録音	米谷 千晴	0548-33-0561

東部地区

名 称	地区	活動内容	代表者	連絡先
音訳グループ かじか	伊豆市	朗読 録音	遠藤 幸子	
しじゅうから	伊豆市	音訳	足立 芳子	
点訳ボランティア えくぼの会	伊豆市	点訳	山口 京子	0558-83-0583
ガイドヘルプボランティア「あまぎ」	伊東市	ガイドヘルプ	日野 悦雄	0557-44-1937
点訳グループ いず・かたつむり	伊豆の国市	点訳 音訳	永田 文代	0558-76-4514
アイボランティア 熱海漁火会	熱海市	朗読 点訳	河瀬 トキ	0557-82-0636
録音グループ やまなみ	三島市	音読	関口 啓子	055-972-3221
沼津木星会 “ ささぶね ”	沼津市	拡大写本	関 美代子	055-951-0018
録音朗読グループ「こまどり」	沼津市	朗読		055-954-1166
マイボランティア沼津木星会 点訳グループかたつむり	沼津市	点訳	半田 ハル	055-962-3655
点字学習グループゆう	沼津市	点訳	渡辺 徳行	055-922-4391
パソコン点訳 “ M I N T ”	沼津市	点訳	森 芳夫	055-925-6648
録音朗読グループすそのうぐいす	裾野市	朗読	磯村 聡子	055-998-0708
御殿場市点訳グループ	御殿場市	点訳	佐々木吉満	0550-88-1915
富士宮朗読ボランティアやまびこ	富士宮市	録音	宮崎 公子	0544-22-2565
点訳グループ富士かたつむり	富士市	点訳	木原美智子	0545-64-7100
アイ・ライフ	富士市	点訳	宇治川良男	0545-71-0968
しゃくなげの会	河津町	音訳	吉野登代子	0558-32-1195
函南町点字グループ	函南町	点訳	佐伯麻美子	055-978-9288
録音グループ「かわせみ」	清水町	録音	鈴木 苗子	055-981-1665
点訳サークル(きつつき)	長泉町	点訳	坂倉 重数	055-987-2614
ひまわりの会	芝川町	録音	望月 秀子	0544-65-0096

西部地区

名 称	地区	活動内容	代表者	連絡先
菊川文庫朗読の会	菊川市	朗読	清水 安子	0537-36-2220
声のサークルやまびこ	菊川市	録音	大田 幸代	0537-36-3580
六つの星	掛川市	点訳	鈴木江美子	0537-23-3917
点ふれんど	掛川市	点訳	橋本 桂子	0537-23-0497
拡大文字グループ「書こう会」	掛川市	拡大	菅沼 島江	0537-22-4685
サークル声	掛川市	音訳	永田 謡子	0537-24-4179
朗読ボランティア「綾の会」	掛川市	音訳	伊藤由紀江	0537-23-2308
PC タートル	掛川市	パソコンサポート	小澤 邦江	0537-26-1597

名 称	地区	活動内容	代表者	連絡先
音訳サークル「こだま」	掛川市	音訳	浅川 弘子	0537-48-2383
点訳サークル てんとうむし	掛川市	点訳	神谷 正二	0537-72-1135
声の広報やまびこグループ	掛川市	朗読	富口 雅子	0537-72-3072
袋井市点訳サークル 「つくしの会」	袋井市	点訳	鈴木あさ子	0538-42-0366
アイボランティアネットワーク静岡	袋井市	音・点訳 拡大 誘導	増本 旭	0538-43-0499
水の環の会	袋井市	音訳	佐藤真理子	0538-42-5325
声の広報	袋井市	朗読 介助	山口 昌世	0538-42-8461
おもと会	袋井市	点訳	関原 安子	0538-42-6964
ふれあいいいききサロンげんき会	袋井市	音・点訳 拡大 誘導	村松 温子	0538-42-8896
ふれあいいいききサロン若草会	袋井市	音訳	海野 孝子	0538-44-0868
てんとう虫	袋井市	点訳	原田 和枝	0538-23-3466
照の会	袋井市	朗読 録音	奥山みつる	0538-23-2494
拡大図書ルーペ	磐田市	拡大	赤堀 芳江	0538-35-4516
磐田PCエイド	磐田市	パソコンサポート	大坪 渡	
磐田点友会	磐田市	点訳	江口 真理	0538-37-6200
音訳ボランティア ふきのとう	磐田市	音訳	田中美弥子	0538-32-7162
ヘレン豊田	磐田市	音訳	原 裕巳	0538-35-6096
きんもくせい	磐田市	朗読	横家 淑子	0538-36-0590
浜松図交会	浜松市	拡大	大谷 研治	053-428-3996
アイナビ浜松	浜松市	外出支援	保科 和子	053-448-2069
かたりべの会	浜松市	録音 点訳	宮谷百合子	053-456-3625
点訳サークル スクスクマリー	浜松市	点訳	貴船 真澄	053-453-4490
浜松六点会	浜松市	点訳	山田 康雄	053-463-6149
やじろべえ点字サークル	浜松市	点訳	松井 嘉子	0539-26-0334
浜松でこぼこ会	浜松市	点訳	小林 玉恵	053-463-0310
点訳ボランティア「歩点会」	浜松市	点訳	袴田 定男	053-452-0975
シーンボイス・はままつ	浜松市	映画音声ガイド	高林 裕子	053-434-2381
朗読サークル プラタナス	浜松市	朗読テ - プ	池田 恭子	053-438-5180
視覚障害者レクリエーション同好会	浜松市	合唱 情報交換	河合 幸男	053-471-0753
点訳奉仕クラブアイフレンド	浜松市	点訳	竹平キミヨ	
ロータスM	浜松市	点訳 ガイドヘルプ	服部 彰	053-592-8007
はまえんどうの会	浜松市	音訳	寺内久美子	053-592-0795
サークル てんとう虫	新居町	点訳	山本さち子	053-594-5128
新居町拡大写本「りんご」	新居町	拡大	加藤 亨子	053-594-5511
音訳 はずなの会	森町	音訳	小池 と志	0538-89-7323

この資料は静岡県ボランティア協会発行の「2007静岡県市民活動団体・ボランティアグループ名簿」より抜粋した。

第2部 静岡盲学校関係



平成19年度
静岡盲まつりにて

(1) 静岡盲学校 110年の年譜

静岡盲学校の沿革

名 称	時 期	摘 要	校 舎	寄 宿 舎
東海訓盲院 予科	M30. 8. 1 12.15	掛川町 肴町にて開講 小田信樹院長就任	杉山氏宅の3畳間	
	M31. 1	小笠郡西南郷村南西郷71に移転		
東海訓盲院	M31. 2. 7 3. 2 3.12	掛川市紺屋町広楽寺に設立 東海訓盲院設立認可を得る 開院式挙行	4畳×1、6畳×2、 職員室	借家
	M32. 4. 8	鈴木康平院長就任		
	M32.11.23	掛川町掛川番外508に移転	元取引所の平屋30坪	
	M33. 1. 4 M34. 1. 1	小笠郡西南郷村に移転 新校舎竣工（敷地258坪、 建物 校舎13坪5勺）	掛川町大火災のため、警察庁舎とし て貸し出し、寄宿舍にて学業を実施 寄宿舍は校舎に隣接、 25坪の女子寄宿舍新築	
私立 東海訓盲院	M34. 4 M39. 1.19 M42. 4. 1	私立東海訓盲院となる 鈴木信一院長就任 榛葉政吉院長就任		
	T 6. 1.15	安倍郡安東村北安東（現静岡市）に移転		男子： 1階 約7坪 女子：平屋建 1階兼食事場
私立静岡 盲啞学校	T 6. 5.28 6.25	私立静岡盲啞学校となる 綾部 関校長就任	2階建2階部分 約10坪 建坪約30坪	
	T 7. 7.12 11.23 T 8. 3.17	静岡市二番町36番地に移転 新築移転落成式挙行 内務省令鍼按営業取締規則による指 定学校の許可を得る	木造瓦葺2階建 28坪 運動場 15坪	
	7.13	財団法人私立静岡盲啞学校設立認可		
私立 静岡盲学校	T13. 4. 1	盲学校聾啞学校令によって市内二番 町36番地に私立静岡盲学校、北番町 23番地に私立静岡聾啞学校を設置す る件、文部大臣より認可を受ける		
	T15. 4. 1	静岡県立代用学校に認可		
	S 7. 2. 7	中村善作校長就任		
静岡 盲啞学校	S 8. 4. 1 9.11	両校合併、静岡盲啞学校として経営を 静岡県に移管される 松永栄重校長就任		
	S 9. 4. 1 5.15 S12. 5. 5	盲啞分離して静岡県立静岡盲学校となる 石坂 定校長就任 ヘレン・ケラー女史、トムソン女史、通 訳 岩橋武夫氏を伴い来校、校舎前で全 校職員、児童生徒と記念写真撮影		

名 称	時 期	摘 要	校 舎	寄 宿 舎
県立静岡盲学校	S12.10.19	静岡市曲金1丁目207(現・駿河区曲金6-1-5)に新築移転	2階建：教室、実習室、校長室、事務室、理科手工室その他	平屋建 舎室8、食堂、浴室
	11. 9 S19.10. 9	校歌制定 校旗樹立式挙行 小杉茂作校長就任		
	S20.11.20	出火により校舎全焼、寄宿舍は延焼を免れ復興まで日中は学業にも使用		
	S23. 4. 1	旧制度を切り替え、小学部、中学部、高等部が設置される		
	6.13	全国盲学校弁論大会優勝		
	11.25	校舎復興及び創立50周年記念式を第1代静岡県知事小林武治氏、進駐軍司令官参列のもと新校舎で挙行、同日琴演奏家久本玄智氏等による器楽演奏を含む記念行事を実施		
	S26. 4. 1 10.21	高等部別科課程設置 全国盲学校陸上競技大会総合優勝		
	S27. 4. 1 4.21	高等部専攻課程設置 文部省算数教育実験校の指定を受ける	高等部校舎完成	南寮を増築
	S28. 3.31	あんま師・はり師・きゅう師・柔道整復師養成施設認可規則により、高等部理療科が認可される		
	5.23 10.18	校舎及び寄宿舍増築落成並びに創立55周年記念式典挙行 全国盲学校体育大会優勝		
	S32. 1.21			中寮増築
	S33.11. 1	創立60周年記念式典を校内運動場で挙行	体育館兼講堂完成	
	S34. 4. 1	兼松錦次校長就任		
	S37. 7. 2 12. 1	全国盲学校点字競技会(高等部)第1位		
	S41. 4. 1	三須 淳校長就任		
	S43.11. 8	創立70周年記念式典挙行		
	S45. 4. 1	昭和45・46年度文部省交流教育研究指定を受ける		
	S46. 4. 1	静岡養護学校高等部を併設		
	S47. 4. 1	新井 安校長就任		
	S48. 3.13 4. 1	幼稚部設置、高等部本科募集停止		中寮を養護 学校に貸与
S51. 4. 1	古賀勝平校長就任			
S52. 3.19 3.29 4. 1	高等部専攻科廃止される 高等部別科は、静岡県立浜松盲学校高等部の分教室となる		新寄宿舍完成 増築	
S53. 2.28 4. 1	山本 隆校長就任	校舎管理棟新築完成		
11.30 S54. 1. 2	別科生徒、全国盲学校短歌コンクール特選	校舎学習棟新築完成		

名 称	時 期	摘 要	校 舎	寄 宿 舎	
県立静岡盲学校	S54. 1. 20	全国盲学校点字競技会小学部第1位、 中学部第2位受賞	プール(15×10m)、 プール管理棟完成 歩行訓練施設完成		
	6. 9	校舎落成及び創立80周年記念式典挙行			
	S55. 6. 30				
	12. 15				
	S56. 4. 1	榛葉 豊校長就任			
	S57. 4. 1	大原文夫校長就任			
	11. 17	全国盲学校点字競技会中学部第3位受賞			
	S58. 3. 31				学習園完成
	S59. 4. 1	脇本亀玖増校長就任			
	S60. 4. 27	小杉あさ先生胸像除幕式を学習棟北敷 地で挙行			
	S61. 4. 1	加藤晴彦校長就任	屋外養護 訓練設備完成		
	S62. 2. 3				
	S63. 4. 1	大石 綏校長就任			
	10. 29	創立90周年記念式典挙行			
	H 2. 4. 1	遠藤幸俊校長就任 高等部保健医療科設置			
	3. 4. 3	平成3、4年文部省特殊教育、教育課程 研究指定校となる			
	5. 4. 1	落合孟郎校長就任			
	8. 4. 1	大石和男校長就任			
	H10. 2. 27				体育館新築
	4. 1	盲学校超早期教育推進事業実施			
10. 22	創立100周年記念式典挙行				
H11. 4. 1	大河内睦美校長就任	寄宿舎耐震補 強及び増築工 事完了			
H14. 2. 28					
4. 1	小川徹郎校長就任	聾学校寄宿舎 と合築			
H14～H15	全国盲学校弁論大会2年連続第3位受賞				
H16. 10. 22	全国盲学校弁論大会優勝				
H17. 4. 1	伊藤律夫校長就任				



静岡盲学校の教育課程の変遷

東海訓盲院	私立 静岡盲啞学校	県立静岡盲学校 1			
		前期	中期		現在
(M30 ~ T6)	(T6 ~ S9)	(S9 ~ S23)	(S23 ~ S47)	(S48 ~ H1)	(H2 ~)
			専攻科 (2年)	専攻科 (2年)	(浜松盲学校 高等部分教室) 保健医療科(3年)
			高等部 本科 別科 (3年) (2年)	高等部 2 本科 別科 (3年) (2年)	
		中等部 (4年) 別科 (2年)	中学部 (3年)	中学部 (3年)	中学部 (3年)
		初等部 (6年)	小学部 (6年)	小学部 (6年)	小学部 (6年)
普通科 (3年) 技芸科 (3年)	盲生部 (5年) 啞生部 (5年)			幼稚部 (2年 3年)	幼稚部 (3年)

- 1...前期・中期という呼び方は公式のものではない。
- 2...高等部別科はS52より浜松盲学校の分教室。

時代	学習内容	
東海訓盲院時代	普通科の内容：修身、国語、算術、講談、体操 技芸科の内容：音楽、鍼治、按摩（按摩専修は2年で修業）	
私立静岡盲啞学校時代	盲生部の内容：修身、国語、算術、体操、鍼按及び音楽 鍼按と音楽は何れかを選択	
県立静岡盲学校時代	前期	大正12年8月公布の盲学校及聾学校令に準拠 中等部卒業者は鍼(灸)按摩、別科は按摩の受験資格取得
	中期	昭和23年4月 六三三制施行に準ずる。 あん摩はりきゅう柔道整復等営業法が制定され営業免許から資格免許となり、免許資格に一定の学歴を要することとなる。 別科卒は按摩、専攻科卒は按摩、鍼、灸の受験資格が与えられるようになったが、静岡盲学校では他校に遅れて昭和30年代に本科でも按摩受験資格が得られるよう科目を一部改めた。 昭和48年度より幼稚部が設置された。当初は2年制だった。 同年度より本科入学募集を停止、別科は中途失明者のみの募集とした。昭和50年度に本科の在籍者皆無、52年度には専攻科在籍者皆無となり、別科は浜松盲学校高等部分教室となったので、静岡盲学校では制度的には高等部が廃止された。
	現在	平成2年より別科は3年制の保健医療科になった。所属は浜松盲学校高等部分教室だが、静岡盲学校に併設という形になっている。

静岡盲学校発祥の地 廣樂寺縁起と時代背景



現在の
廣樂寺

廣樂寺は静岡県立静岡盲学校発祥の地である。ここに同寺発行の「廣樂寺縁起」という1枚のパンフレットがあるが、精読すると時代の変遷が走馬燈の如く浮かんでくる。「縁起」とは「由来」のことであるが、順を追ってピックアップしながら、書き進めることにする。なお、枠内が縁起の原文である。

(注) 縁起文中には「広楽寺」、現代表記では「廣樂寺」となっているが正確には「廣樂寺」である。

設立	年号不詳。静岡県榛原郡東福田の要地に天台宗の庵として設立。現在は付近に住む人々がお堂を建て、広楽寺の本地と語り継いでいる。
----	---



現在も残る
廣樂寺跡

廣楽寺設立の時期であるが、上記の通り不明である。天台宗が最澄によって確立されたのは、大同元年（806年）で平安時代が始まったばかりの時期であるから、同時代またはその後の鎌倉時代（1192年～）ということになる。この地名は現在、牧之原市に属している。

1235年 (嘉禎1)	広楽寺由緒縁起によれば、この年親鸞上人が関東よりご帰洛の途中お立ち寄りになり、六字の名号を授けられ秘宝とする。(現存)
----------------	---

親鸞上人は浄土真宗の開祖である。天台宗の堂僧となった後に、浄土宗の法然の弟子となった。親鸞は、あくまで浄土宗を真の宗教であるとの信念をもって、各地に念仏道場を開き布教に努めた。若干の教義の相違が明白となり、親鸞の没後に浄土真宗が確立されたようだ。

建永2年（1207年）この師弟らに法難が襲いかかった。興福寺の訴えにより、専修念仏の停止と、道西など4名に死罪、法然、親鸞ら8名に流罪の決定がなされた。親鸞は僧籍を剥奪され、越後国府に流された。建暦元年（1211年）11月、法然と共に罪を許された。法然は翌年、80歳で京都で没した。親鸞上人は建保2年（1214年）越後を発ち、約20年間関東で布教活動を行ったが、62,3歳の頃、京都に帰られた。廣楽寺を訪れたのは関東からの帰途であったと思われる。弘長2年1月28日にお亡くなりになっているが、現在の暦に換算すると1263年1月16日であった。

1468年 (応仁2)	蓮如上人、関東巡拝の際お立ち寄りになり、ご教化を受け帰順、六字名号を授けられ秘宝とする。(現存)
----------------	--

この時は室町時代が始まってから、130年経過している。

蓮如上人は京都東山の本願寺の生まれである。父は第7世の存如。上人は後に第8世となる。蓮如の幼年期、本願寺は不振の極みにあった。15歳で得度、その後、興福寺に修学した。その後、様々な経緯を経て寛政6年、延暦寺は蓮如と本願寺を仏敵と断じ、蓮如は近江など各地を転々とするが、文正2年（1467年）延暦寺と和議が成立した。ただし蓮如の隠居と、長男順如の廃嫡が条件となった。応仁2年北国、東国の親鸞の遺跡を訪ねる旅を開始、廣楽寺を訪ねられたのも、この時である。蓮如上人は明応8年（1499年）京都山科で生涯を終えられた。室町時代終焉の約70年前のことであった。

1558年 (永禄1)	天台宗本楽寺(安城市)の僧祐寿は、甥である近江国の郷士今井権七郎の勧めにより、この年真宗に改宗、榛原郡の広楽寺へ入寺、あとでこの寺で生まれた長男の祐浄は広楽寺の跡継ぎと定められることになる。
----------------	---

今井権七郎なる人物は、このあとの縁起にも登場するが、各種データを検索してもヒットせず、詳細は不明である。

この時代には戦国の武将、大名であった織田信長(1534年~1582年)が活躍していた。信長の父、信秀は尾張下4郡の守護代であった織田信友の家臣に過ぎなかったが、次第に尾張中西部に支配権を拡大していた。信秀没後、信友は信長の同母弟の織田信行の家督相続を指示し信長と敵対するが、信長は叔父の織田信光に命じて信友を殺害させた。ここに守護代清州織田家は滅び、信長は永禄2年(1559年)までには尾張国内の支配権を得ることになった。

世に知られる桶狭間の戦いは1560年で、2万ないし4万と言われる今川義元の侵攻軍に対し、次々に城を奪われる劣勢に立っていたが、信長は善照寺砦で5000人という小規模の軍勢で奇襲をかけ、今川義元を討ち取り総大将を失った今川軍は敗走した。永禄3年5月19日(1560年6月12日)のことである。

1570年 (元亀1)	織田信長が自治都市大阪の中心、石山寺内町へ大群を以て襲い掛かった。世に言う本願寺十年戦争である。この時顕如上人に従い、信長軍と戦った武将の中に今井権七郎もいた。(西本願寺所蔵)
----------------	--

信長の短い生涯をたどってみると、休む暇もないほど戦争に明け暮れしている。上記の本願寺十年戦争というのも、10年間掛かりきりで本願寺と戦っていたわけではない。様々な攻防が繰り返され、この戦争自体歴史の流れの中に霞んでしまっているような印象さえ受ける。

永禄8年(1565年)京都の武将、三好3人衆らは第13代足利義輝を暗殺し、第14代将軍として義輝の従兄弟の足利義栄を擁立していた。彼らは更に義輝の弟の義昭の暗殺も企てたが逃亡され、義昭は越前国の朝倉義景の元に身を寄せた。しかし義景は三好氏らの追討の動きを見せなかったため、永禄11年(1568年)義昭は信長に追討を要請し、応諾を得た。

同年9月、信長は天下布武への大義名分として第15代将軍として義昭を擁立し上洛を開始した。前段階として、信長は政略結婚により武田信玄と同盟を結んでいる。

信長軍に応戦したのは南近江の六角義賢、義治父子だが敗退し、伊賀に逃亡、三好3人衆も信長に臣従、関係者も阿波に逃亡したので、上洛後わずか半年をもって織田政権が誕生したのである。

この時代、謀反、裏切りは日常茶飯事だった。永禄12年には、信長が美濃に帰還した隙をつき三好3人衆が再び反旗をひるがえすが、浅井長政、明智光秀らに鎮圧されている。

その後、信長と足利義昭との対立が深まり、義昭は信長打倒の御内書を諸国に発した。これに従ったのは朝倉義景、浅井長政、武田信玄、毛利輝元、三好3人衆、比叡山延暦寺、石山本願寺などであった。

信長は元龜元年、徳川家康軍と共に近江国姉川河原で浅井、朝倉軍と戦い、これをうち破った。

同年8月摂津で旗揚げした三好3人衆を討つべく出陣するが、石山本願寺の加勢もあって苦戦する。これが本願寺十年戦争の始まりだろう。これから後も信長に苦難の日々が続く。復活した浅井長政、朝倉義景に延暦寺が加わった連合軍との攻防、伊勢長島一向一揆衆の叛乱などが、その始まりである。

1571年 (元龜2)	武田信玄が駿遠の覇権を確立し始め、この年信玄は小山(吉田町)に砦を築く。この時、広楽寺は武田水軍の輸送基地として使われたため、祐寿は4才の祐浄を連れて菊川町の平尾村に一時避難した。しかし高天神城の城主小笠原長忠の招きを受けるにより陣僧として紫雲山西方寺を任された。
----------------	--

武田信玄は甲斐源氏武田家の嫡男として大永元年11月3日(1521年12月1日)に誕生した。信濃の上杉謙信との5回に亘る川中島の戦いを行い信濃をほぼ平定、甲斐、信濃、駿河、西上野、遠江と三河と美濃の一部を領した。信玄は駿河に侵攻し今川氏を破り、駿府城に入城したのは永禄11年(1568年)12月だが、小山に砦を作った僅か2年後の元龜4年4月12日(1573年5月13日)に持病が悪化し、侵攻先の三河から甲斐に戻る途中、信濃国駒場にて病没している。死因には諸説あり労咳(肺結核)、食道癌、胃癌、肺炎などが有力である。また狙撃された傷の悪化、日本住血吸虫の寄生による体力の低下、信長による砒素での毒殺などの説もある。

水軍とは今の海軍のことである。武田水軍は1571年に創設された。船そのものの種類は各種あったと思われるが、50数艘あったようだ。他の大名の水軍との比較であるが、天正4年(1576年)木津川の戦いで織田水軍を破った毛利水軍が800隻であったというから、数的には小規模だったようだ。ただし天正6年11月の第2次木津川の戦いでは、信長考案の鉄甲船6隻に毛利水軍は大敗を喫しているの、戦力と船の数とは必ずしも連動しないことは現代においても同様である。

1574年 (天正2)	武田勝頼により高天神城は落城し、武田支配下となる。祐寿はこの時、勝頼に召し抱えられて平尾村の地を安堵、甲斐の国へ同行する。
1580年 (天正8)	今井権七郎は出家し、顕如上人より浄了の法名を賜る。従兄弟の祐浄が住む平尾村に赴き、ここに祐浄とともに本楽寺を再興し、後に開祖となる。
1581年 (天正9)	高天神城は徳川家康により落城、本楽寺も焼失し、浄了は宝物を持って相良町の大澤に避難、後に地名を取って大澤寺と改める。広楽寺に残る西方寺縁起に依れば、この時西方寺も荒廃したため、祐浄は小庵を建てて傷んだ本尊を奉安した。

高天神城は大東町下土方(しもひじかた)にあったが、町村合併で現在は掛川市に属している。城そのものは残っていない。築城の時期は正確には分からないが、今川氏により16世紀の開始前後に作られたらしい。当時、今川義元は小笠原長忠親子をこの城に配していた。

今川氏滅亡後は徳川家康の支配下となるが、小笠原長忠は引き続き城將として置かれたのである。

勝頼は信玄の子で武田二十四將の一人である。1574年は信玄病没の翌年である。高天神城はかつて元龜2年(1571年)信玄が攻略を試みたが、堅固な守りに即日撤収を余儀なくされている。

勝頼は天正2年(1574年)に再度、高天神城の攻撃を開始、長忠は織田、徳川に加勢を要請したが、両家共にその余裕が無く援軍は来なかった。そのため長忠は降伏を余儀なくされたのである。

天正3年(1575年)武田氏は長篠の戦いで大損害を受け、織田氏、北条氏を敵に回すことになり衰退の道をたどる。

天正8年(1580年)、家康は横須賀城など6カ所の拠点を構え、高天神城を兵糧攻めにする作戦を取った。当時、高天神城は今川氏の旧臣である岡部元信が城代を勤めていたが、勝頼も援軍を送る余裕は無く、天正9年3月元信は城門を開け放ち討って出て、城兵700余名と共に討ち死にし、高天神城は落城したのである。廃城は翌年天正10年である。

なお、上記の平尾村は明治の町村合併時にも既に消滅していたようだが、現在の菊川市、高天神城址東北3kmに平尾という地名があるので、そこに位置していたと推測される。ただし本楽寺なる寺は地図上には見あたらない。

「安堵」とは本来「安心する」という意味だが、この場合は「領地を与えられ保証される。」ということである。

1600年 (慶長5)	家康は幕府開設のために有能な者を召し抱え、官僚として登用した。祐浄は掛川藩主の山内一豊に召し抱えられ掛川藩の祐筆(書記官)となる。この時中町(現在の掛川城とJR掛川駅の間付近)に所領を得た。またこの年、榛原町では天台宗の一乗院が真宗に改転し、川崎の明照寺として設立。今も「広楽寺は山の向こうに行ってしまった」と語り継ぐ古老がいる。
----------------	---

山内一豊は過去何度かドラマ化されていて、最新のものは2006年のNHK大河ドラマ「功名が辻」で、一豊を上川隆也、千代を仲間由紀恵が演じている。一豊は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と主君を替えている。掛川城主になったのは、秀吉の臣下であった天正18年(1590年)の頃である。秀吉は1598年に病没したが、豊臣政権の維持をはかる石田三成と政治の実権を握りつつあった徳川家康が美濃国関ヶ原で天下分け目の戦闘を行ったのが、いわゆる関ヶ原の合戦で1600年のことであった。

決戦は9月15日午前7時に火ぶたが切られた。徳川軍は10万5千、石田軍は8万5千であるが、実戦に加わらなかった軍もいた。

石田方は劣勢ながら善戦したが、一部が徳川方に鞍替えし午後3時頃、総敗北となった。光成らは捕らえられ殺害された。

山内一豊はこれより前、掛川城を家康に譲り、上記の合戦では東軍に加わっていたが、さしたる手柄はたてていない。しかし、以前の功績により、1601年領地は掛川から土佐に移された。掛川では5万石であったが、土佐では9万8000石に加増

された。その後、検地により20万2600石を領有する大名になっている。

山内一豊は「やまのうちかずとよ」と読まれることが多いが、書簡などの資料から「やまうちかつとよ」と読むのが正しいと考えられている。

1620年 (元和6)	祐浄の長男、唯勝坊が任地の江戸神田にて分寺を創建するも、現地で没したため開基となる。後の江戸今戸広楽寺は、初代尾上菊五郎の菩提寺ともなった。
1636年 (寛永13)	広楽寺過去帳の法名は次の記載から始まっている。 釋祐浄 當山中興開基也 69才 二代目は、座頭職にあった三男の良存が継いだ。
1683年 (天和3)	良智は幼いころの病により目が不自由であった。父の良存は座頭職にあった縁もあり、盲人にも耳から仏の功德が伝わるようにと「法鐘」を鑄造し、境内に奉懸した。 また一紙半銭の功德を以て紫雲山西方寺の本尊を再興、江戸にて開眼供養をして亀惣川近くにお堂を建て、管理を阿彌陀寺に委ねた。

尾上菊五郎は歌舞伎役者であるが、現在、活躍しているのは七代目である。

縁起にある「座頭職」は「ざとうしき」と読む。「座頭」というのは江戸時代における視覚障害者の階級であるが、座頭職という役は必ずしも視覚障害者が務めたのかは分からない。なんとなれば「座」というのは商業者の同業組合であり、そのまとめ役が座頭職と呼ばれたという史実があるからである。例えば京都においては帯座の座頭職を女性が務めたという記録がある。

法鐘は戦争中に金属の供出の対象になり、現在も行方不明であるという。なお天和3年の良智による「鐘鑄奉加帳」が現存し、かつて静岡盲学校の関係者で組織された広楽会の例会でそのコピーが参加者に配布されたことがある。

「一紙半銭」とは一枚の紙と半文(もん)という意味で、現代でも、「きわめて僅かで価値の無いものの例え」として使われていると辞典に出ているケースがある。

しかし上記の文では、その後に功德(良い行い)なる言葉があるので、庶民からの浄財という解釈で良いのかと思う。例えであるから字句にとらわれることは無いが、半文とは現代の貨幣価値では、どの程度のものだろうか。

天和の数年後には元禄の年号があるが、元禄では物価が急騰した。天和の頃は米1

升が50文程度で、現在米10kg5000円で換算すると、1文は約60円になる。半文だと約30円だが、我々がお賽銭を懐が痛まない程度に喜捨しているのと同程度の感覚ではないのだろうか。

一紙半銭の喜捨というのは、ずっと昔の元応2年(1320年)京都の了源上人の興正寺建立の史話にも見られる。当時、阿弥陀如来と聖徳太子を安置するお堂を建てるのが目標であった。この時は2体の像を先に作ってしまい、これを各地に運びながら勧進を行った。「勧進」とは仏像とかお寺を造るために行う寄付のことを指す。勧進帳とは寄付者の名簿ではなく、勧進を行う際に用いた寺の縁起など記した趣意書のことである。

1744年 (寛保4)	この年広楽寺は、寺領を中町から南西郷(現、紺屋町・肴町・駅前一带)に移したと、文化2年編纂の「掛川誌稿」に記載。
1849年 (嘉永2)	たまたま三代目尾上菊五郎は興業中に掛川の宿で亡くなった。妻と付き添いが尋ねてくると、何と先祖の菩提寺である江戸今戸広楽寺はこちらの分寺であった。不思議の因縁と喜んで境内(紺屋町)に墓を建て、この経緯を過去帳に記載した。

廣楽寺は1854年の安政大地震で倒壊、明治22年に落慶したが、1974年(昭和49年)に土地区画整理事業により、現在の中央2丁目に移転した。尾上菊五郎の墓も現在地にある。



移転前の廣楽寺

<p>1898年 (明治31)</p>	<p>盲人にも近代教育が受けられるようにと、静岡県下初の盲学校「東海訓盲院」を広楽寺境内(肴町)に設立した。後に県立の指定を受けて静岡市へ移設し、名称を「県立静岡盲学校」と改めて今にいたる。</p>
-------------------------	---

廣楽寺パンフレットより
「静岡県盲教育発祥の寺」とある



三代目尾上菊五郎の墓



静岡市を訪れたヘレン・ケラー女史

ヘレン・ケラー女史は3回来日され、第1回目には静岡盲学校、静岡聾学校も訪れているが、詳細の記録が見あらず沿革では、静岡聾学校のみが1行記載しているにすぎない。他の訪問先は、静岡英和女学院と久能の石垣イチゴ狩り農園「ストロベリーフィールド」で後者はそのホームページに来園を記載している。以下の記事は共に静岡民友新聞の記事で重複している箇所もあるが、紹介する。

1937昭和12年5月ヘレンケラー（三重苦の聖女）市公会堂で講演

混濁の世に迎えた三重苦の聖女

昭和11年2月26日、東京で陸軍青年将校等が1,400人余りの兵を率いて、クーデターを起こし、内大臣、大蔵大臣らを殺し、議事堂などを占拠するという2.26事件が起こった。この時、元老西園寺公望は興津の坐漁荘に居たが、反乱軍の攻撃を避けるため、市内の県警察部長官舎や県知事官舎へ避難し、一時市内は内戦寸前の緊張も走った。しかし、29日、反乱は鎮圧され事なく終わった。この反乱部隊の将兵達は「ああ人栄え国亡ぶ、盲いたる民世に躍る、混濁の世に我立てば義憤に燃えた血汐湧く」と歌っていた。混濁の世とは、娘が身売させられるような農村の疲弊をよそに、政治家・財界人が私利私欲に没頭したためにもたらされた暗黒の社会の事であった。事件の後、その混濁は一層深刻になった。

2月、難産の末誕生した陸軍大将林銑十郎を首相とする林内閣は、議会と対立し、3月には「食い逃げ解散」を行い、4月には総選挙が行われた。月末静岡ではその結果と共に大量の違反記事が日々の紙面を賑わしていた。

そんな中で、「聖女を迎えて感激の講演会、今ぞ聴く“奇蹟の声”」の新聞の見出しが明るく輝いた。「全県民待望の的となっていた国賓待遇の聖女ヘレンケラー博士は、4日午後4時15分静岡着の列車で来静し、生神そのままの姿をホームに現し（中略）歓迎の人々からあびせかけられる拍手を聞くが如く、振りかざされる日米国旗を見るが如く喜びの情をはっきり表現、劇的情景をみせ…」と静岡民友新

聞は報じている。女史は4日には、市公会堂で2,500人の聴衆を前に「闇と沈黙に羽ばたく魂」と題し、三重苦を背負った自身の生涯について講演、5日には、女性ばかりの聴衆に向かって「愛と教育の勝利」と題し、「女性のすすむべき哲学的教訓を教示し絶大な感銘を与えた」のである。

この女史の講演は、戦前における静岡市の福祉意識の高揚と水準を物語っている。しかし、それも次第にファシズムの中に呑みこまれていった。

「見る読む静岡歴史年表」羽衣出版 p.139より



昭和12年 ヘレン・ケラー女史静岡盲学校来訪時の記念写真



写真向かって右手の生徒たちの列の中、前から3列め中央の模様のある洋装の女性がヘレン・ケラー女史、その右がトムソン女史、石坂校長。ケラー女史の左には随行英日通訳のライトハウス岩橋武夫氏。

写真提供は、静岡市葵区駒形在住 内野氏（昭和15年卒業）



来静中の奇跡の聖女ヘレンケラー女史は、5月4日夜、静岡市公会堂における講演会に出席、一場の講演を行い一切の歓迎を断り、直ちに英和高女校長宅に赴き新緑に囲まれた同邸に一夜を明かしたが、5日は午前6時起床、主婦の友社から贈られた「白天皇国」のバラの鉢植えが部屋一杯に香るのに喜ばれて異郷に厚きもてなしを感謝しながら一切に訪客を退けて、静かに朝食をすまされ、トムソン嬢が愛好の「日本緑茶」をケラー女史にもすすめられて、お茶の国に来られた意義のある朝を楽しまれ、身の回りの支度等不自由の身に自らせられ、午前10時英和女学校における歓迎会に臨まれ、花輪を贈られてニコニコと温顔を生徒の上に垂れて一場のあいさつをなし、静岡市公会堂における講演会に臨まれ、県下女学校生徒、婦人会その他満場の女性に向かって三重苦の生涯を語り、宗教団体その他の主催の午餐会に臨み、午後1時40分発列車にて名古屋に向かった。

「新聞に見る静岡県の100年」
静岡新聞社 より



静岡英和女学院を訪問した
ヘレン・ケラー女史(中央)と
ガブナク校長(左)、トムソン女史(右)
(写真提供：静岡英和女学院)

ストロベリーフィールドの
ヘレン女史
(同園ホームページより)



静岡市滞在時間は非常に短く、記事には無いが5日の朝から午前10時の間で静岡盲学校、静岡聾学校、イチゴ狩り農園と回られたと推測される。

ヘレン・ケラー女史の来日の記録

ヘレン・ケラー女史は昭和12, 23, 30年の3回来日され、第1回目には静岡盲学校も訪問され精力的に日本各地を回られたが、1, 2回目の旅程を紹介する。

出典「日本ライトハウス40年誌」

第1回(昭和12年)

月	日	訪問都市	聴衆概数	主な訪問先
4	15 - 18	東京	18,000	新宿御苑 高松宮邸 宮内省 外務省 内務省 文部省 米国大使館
	19 - 24	大阪	32,000	府庁 市役所 商工会議所 大阪朝日新聞社 大阪毎日新聞社 ライトハウス
	25 - 30	東京		三省堂 主婦の友社 温古学会 官立東京盲学校 同聾啞学校
5	2	横須賀	1,500	馬淵聾啞学校
		鎌倉	1,500	
	4 - 5	静岡	5,000	静岡県立静岡盲学校 同聾啞学校
	5 - 6	名古屋	6,000	愛知県立名古屋盲学校 同聾啞学校
	7	彦根	1,500	滋賀県立盲学校
	7	大津	1,000	
	8 - 10	京都	9,000	京都府立盲学校 同聾啞学校
	10 - 13	奈良	700	奈良県立盲啞学校
	14 - 20	神戸	8,000	兵庫県立盲学校 同聾啞学校
	21 - 22	岡山	5,000	岡山県立盲啞学校
	22 - 24	広島	6,000	広島県立盲学校 同聾啞学校
	24 - 26	下関	2,500	山口県立盲学校
	26 - 28	福岡	7,000	福岡県立福岡盲学校 同聾啞学校
	28 - 29	長崎	4,500	長崎県立盲啞学校
6	31	熊本	5,000	熊本県立盲啞学校 回春癩病院
	1			
	2 - 5	大分	2,000	大分県立盲啞学校
	8 - 9	岐阜	2,500	岐阜県立盲学校 同聾啞学校
	9 - 10	金沢	2,000	石川県立盲啞学校
	10 - 11	長岡	2,000	新潟県立長岡盲啞学校
	11 - 12	新潟	3,000	新潟県立新潟盲啞学校
	12 - 16	秋田	4,000	秋田県立盲啞学校
	16 - 17	弘前	1,500	青森県立弘前盲学校
	17 - 18	青森	5,000	青森県立青森盲啞学校
	18 - 22	函館	4,500	北海道函館盲啞院
	22 - 23	小樽	2,000	小樽盲啞学校
	23 - 25	札幌	5,500	札幌盲学校 同聾啞学校
28 - 30	盛岡	4,500	岩手県立盲啞学校	
7	30 - 2	仙台	7,500	宮城県立盲啞学校
	2 - 3	福島	3,000	福島県立盲啞学校
	3 - 4	水戸	2,500	茨城県立盲啞学校
	12 - 26	(朝鮮、満州：京城 平壤 奉天 大連などの盲啞関係学校 癩病院など)		

女史訪問時、静岡盲学校は市内二番町 36、静岡聾学校は市内北番町 23 にあった。

第2回（昭和23年）

月	旅程などの概要
8	29日 岩国着 夜行列車で東京へ 30日 マッカーサー訪問 （9月2日まで箱根で静養）
9	3日 - 7日 東京、横浜訪問 8日 上野発 仙台 12日 仙台発 函館 13日 函館発 湯川 16日 札幌 19日 札幌発 酒田 22日 金沢 29日 名古屋
10	4日 - 8日 大阪 8日 神戸、奈良 10日 - 11日 京都 11日 - 15日 広島 15日 - 16日 福岡 26日 - 29日 長崎 29日 午前8時 長崎発 午後8時48分 東京着

ライオンズに呼びかけたヘレンケラー女史の演説

1925年7月30日 オハイオ州シーダーポイントにおいてライオンズ国際協会第9回年次大会会議録に残る、今も尚語り継がれているヘレン・ケラー女史の演説です

親愛なるライオンズご夫妻の皆さん！

皆さんは「好機」ということを、ある移り気な婦人になぞらえた言い伝えを、お聞きになったことがあると存じます。その婦人は、各戸の扉を唯一度だけしか叩かず、もし叩いた扉がすぐ開かれないと、どんどん行ってしまっ、帰っては来ないのです。だが、そういったことは、よくあることです。愛らしくて手に入れたくてならないご婦人は、決して待つてはくれないでしょう。（笑声）戸外へ出向いて行って、ひつつかまえなくてはなりません、私こそ、皆さんにとって、その「好機」なのです。私は皆さん方の扉を叩いて、取り上げて下さればよいがと願っているのです。先程の言い伝えは、幾人かの美しい「好機」たちが、各自、同じ扉に現われた時、皆さんがどうすべきかを語っているのではありません。皆さんが一番気に入った一人を選ばねばならないでしょう。どうかこの私を取り上げて下さることを願っております。（拍手）この会場では、私は一番若いですが、私のこの提案は、奉仕としてはこの上なく好機に満ち満ちたものです。

米国盲人福祉財団は、設立後四年になったばかりです、それは盲人にとって、緊急にこれだけは必要という域から脱皮したものでしたが、しかもそれは視力のない者たち自身の力によって生み出されたものでした。それは広がりにおいても、重要さにおいても、国家的であると同時に国際的でもあるのです。それはこれまで到達した私たちの主題に関する、最善で最も進んだ考えを代表するものです。その目的は、盲人たちの経済価値を増大することや、まともな活動の喜びを与えることによって、彼等が何処にいても、もっとやり甲斐のある人生を送れるようにすることです。

若し今、皆さんが突然、盲目になったとしたなら、どんな気がするかを想像してみてください。皆さんが仕事も自立もなくなり、日中なのに夜中のように躓いて、手さぐりをしている自分自身を、頭の中に描いてみてください。その暗黒の世界の中で、もし一人の友人が皆さんの手をとって、「私と一緒にいらっしやい。そうしたら、あなたが眼の見た頃によくやっていた幾つかのことを、どうすればよいか教えて上げましょう」と云ってくれたとするなら、皆さんはどんなにか嬉しいことでは

う。正に親切な友とも云うべき米国盲人福祉財団は、もし眼の見える人々が必要な支援を与えて下さるなら、この国の全ての盲人たちのためのものになろうとしています。

皆さんは、他の人の指字で何気なく云われた一寸した言葉を通して、別の人の中から届いた一条の光が、私の心の暗黒にどのように差し込み、私が自分自身を見つけ、世界を発見し、神様を見出したかを、お聴き下さったと思います。それは私の恩師が私を理解し、私を捕えている暗く、沈黙の拘束を打ち破り、私が自分自身のためだけでなく、他の人のためにも働くことが出来ることを教えて下さったからです。私たちが金より以上のものを望むよう配慮されています。届ける人の心情や関心のない贈物は空しいものです。もし皆さんが配慮して下さって、私たちがこの偉大な国の人民に注意を喚起することが出来るなら、盲人たちは本当に盲目にうち勝つでしょう。

私があなた方ライオンズの皆さんに持参した好機とは、米国盲人福祉財団の働きを助成して、スポンサーとなっていていただくことです。どうか私を援助して、予防の施されない視力障害者もなく、無学な聴力、視力の障害児もなく、手助けもされない盲目男女もいないような時代が、一日でも早く来るようにして下さいませんか？ 私はライオンズの皆さんに訴えます。視力があり、聞く力をお持ちの皆さん方は、強く勇敢で親切であります。この暗黒を無くする運動における、盲人たちの騎士に、自らなっていていただけないでしょうか？

ご静聴、有難うございます。（全員起立して、拍手鳴り止まず）

（加計ライオンズクラブ・訳）

（附記）この記念すべき演説が終ると、ニューマン会長はこの素晴らしいメッセージに賛同したが、それに呼応したように、次の二つの動議が議決された。

ヘレン・ケラー女史はライオンズ国際協会の名誉ある会員であることを宣言する。
ケラー女史の先生をライオンズ国際協会の副名誉会員として認めること。

この動議が採択されると、ケラー女史は云った、『私は幸せです。そしてライオンと呼ばれるに似つかわしい人間であることを、誇りに思います』

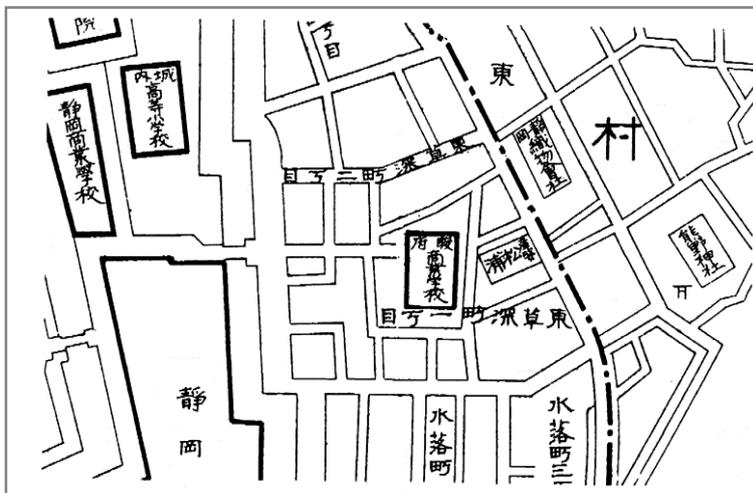
（日本アイバンク運動推進協議会ホームページより収録）

(2) 写真、図などに見る静岡盲学校の歩み

1. 静岡盲学校以前の時代



私立東海訓盲院時代の生徒（明治34年当時）



私立静岡盲啞学校の記述「静岡市の百年」大正より

盲啞学校

大正六年一月篤志家の寄付をもって、熊野神社前に借家し、事業に経験のある小杉あさ、榛葉政吉を採用して開校した。

併し年ごとに寄付が減少したため、同八年七月財団法人とし、宮内省の御下賜金と、文部省及び県、市の補助金をもって辛うじて経営を支弁していた。

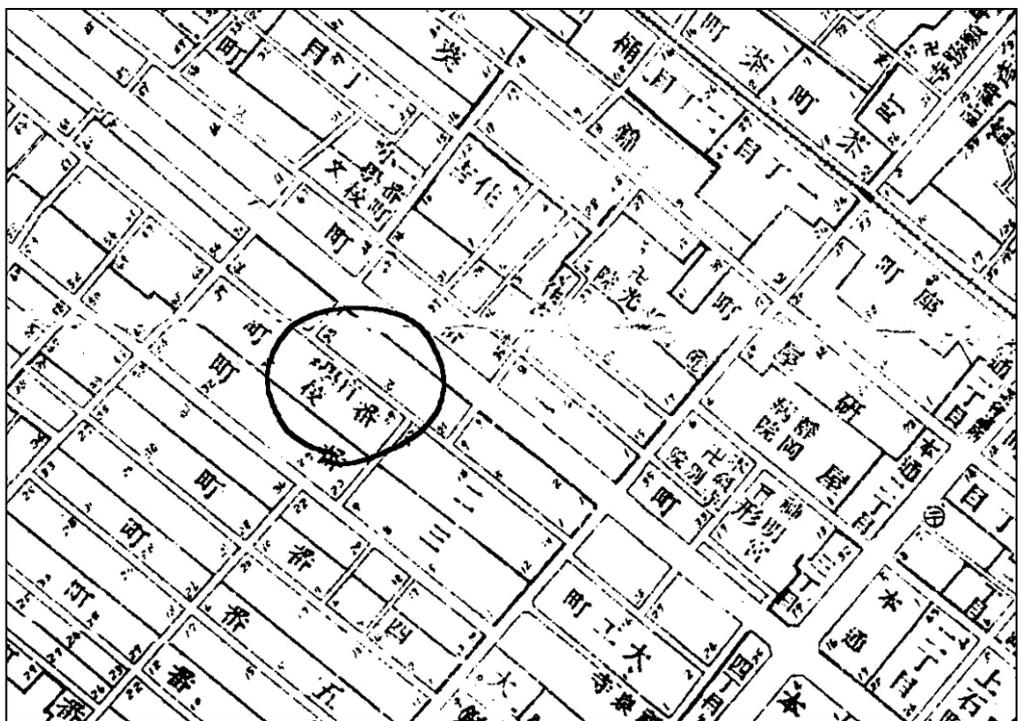
二番町に新築した盲啞学校はその後狭くなったため、北番町にその聾啞部を分ち、二番町分を盲学校、北番町分を聾啞学校とした。



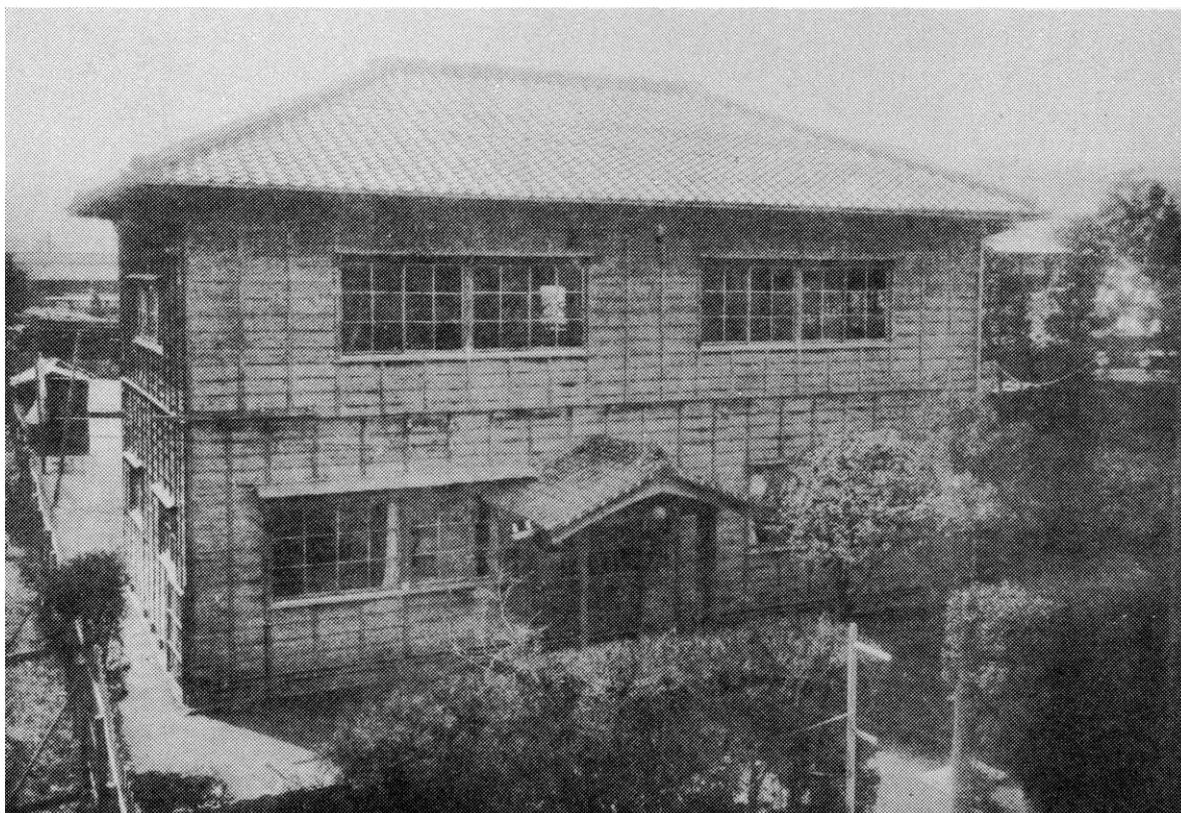
私立静岡盲啞学校の職員

前列左より小杉あさ氏、綾部寛校長、小西信八氏（東京盲学校校長）、原崎源作氏。
後列左より榛葉政吉氏、星菊太氏（静岡師範学校校長）、石井勇氏。
小杉・榛葉両氏は盲生部、石井氏は啞生部の教員。

静岡市二番町への移転
大正9年頃の地図に盲学校の記載がある



二番町時代の校舎



2. 静岡盲学校時代

昭和12年、静岡市曲金に移転。新築の校舎全景



昭和33年撮影の航空写真



昭和45年撮影の航空写真



小学部



合唱



組体操

演劇



中・高等部



器楽合奏



演劇



箏曲部の演奏

創立70周年記念行事運動会より





昭和45年度卒業生、職員一覧



この記念誌「むつぼし」のCD版には、昭和45年度の静岡盲学校の卒業式の様子が録音されたファイルがMP3形式で収録されている。

この時の卒業生と在籍全職員を撮ったのが、上の写真である。ただし、記念写真は卒業式の1週間程度前に撮影する慣習があり、式当日来られた小杉元校長、望月PTA会長、高橋同窓会会長などの来賓は撮っていない。中央、かっぶくのいい方が戦後では3代目校長の三須先生、その右が教頭の清水先生、その右が教務主任の樽林先生、左端が事務長の渡辺先生、各先生はすべて亡くなっている。背景は昭和37年完成の体育館兼講堂で15年くらい使用された。卒業生といっても、小学部、中学部の生徒はほとんど上の学部に進学するので、実際に母校を巣立つのは高等部専攻科、別科の卒業生のみであった。最後列中央から右に専攻科生 鈴木みつえ、日沖清成、渡邊典保、伊豆川重男、曾根 学、海野静香、小澤 賢の7名、その右に別科生 倉島金作、一人おいて上杉政江の2名が並んでいる。この写真に撮っている児童生徒は約40名であるが、全校ではその数倍は在籍していたわけで、当時の静岡盲学校の隆盛ぶりが偲ばれる貴重な記録である。

(3) 静岡盲学校の発展に尽くした人達

静岡盲学校は西暦2008年、平成20年をもって創立110周年を迎える。盲学校、聾学校は共に当初は民営で始まっている。その過程では行政からの支援も乏しく、篤志家の寄付に依存していたこともあった。その間、不景気の時代もあり全国的にみても倒産、廃校に至った例は散見される。近くの例を挙げれば、静岡市清水区の「江尻按鍼学校」が大正期に数年間の経営の後に廃校になっている。しかし、現在その存在自体が「清水市史」その他の資料、現場の調査に依っても全く把握できない。このように考えると、110年の歴史は多くの有名、無名の人達の血の滲むような努力に依って支えられてきたことが分かる。ここでは著名の方々について、そのプロフィール業績等を既存の文献とひと味、異なる角度から記述することとしたい。

松井 豊吉

静岡盲学校の嚆矢、東海訓盲院の創始者である。現在の掛川西高等学校の前身、掛川中学の卒業生であり、入信の時期は明らかでないが、クリスチャンでもある。晩年は静岡市に在住、故田村みつ子先生と同じ教会であったと伝えられている。

初めは藤枝の新聞店に勤務していたが、激務のためか左眼の視力が低下、3カ年の眼科医の治療の甲斐もなく右眼の視力も低下、更には脚気のため行動まで不自由になった。明治29年5月の事である。当時は静岡市の駿府公園の西側の城代橋の近くに母と共に居を移していた。当時は今の駿府公園から城東町あたりまで、日本陸軍の練兵場（演習場）になっていた。

同年7月、東京に移り赤坂病院で治療を受けるようになったが、病苦と貧困に疲れ果て、絶望したことがあったようだ。

同年10月怪我が元で母が死亡した。これを契機に東京盲啞学校に入学して再起を図ることを決意した。東京盲啞学校は明治9年3月15日に楽善会訓盲院として設立され、途中から啞生も教育するようになり、明治17年5月訓盲啞院と改称している。明治19年には後述する小西信八氏、後年日本点字を創案した石川倉次氏らが教授陣に加わった。明治20年には東京盲啞学校と改称した。なお



盲啞が分離し東京盲学校となったのは、ずっと後の明治42年4月のことであるから、松井氏が東京盲学校に入学を願い出たという従来の一部文献の記述は正確ではない。

結果的には年齢超過で入学は認められなかったのであるが、小西校長の特別のはからいで聴講生としての通学が許可された。この間、小石川界限で寒風の中、杖を頼りに笛を吹いての流しの按摩も経験している。

当時の料金は4銭であった。（これはもりそば2杯、または並日本酒3合の値段）この年、幸いにも治療が成功して右眼の視力が回復した。

松井氏は明治30年には掛川で東海訓盲院設立の運動を開始しているので、聴講期間は1カ年であったと考えられる。

5月18日に掛川町の中学の級友飯塚仙太郎氏を訪問、盲人教育の必要性を説き趣旨の賛同を得た。当時、氏は獣医、新聞販売業、町会議員であり、趣意書を静岡民友新聞、静岡新報などの新聞に4日間に亘って掲載した。また趣意書を内務省、知事、官公署、学校などに送付するなどして精力的にPRに努めた。このことで衆議院議員 杉山東太郎氏、大池村村長 平尾平十氏などの有力な賛助者も得ることが出来た。

早くも7月2日に松井氏の借家に於いて、紅林しかという女生徒に点字の授業を開始している。文献によると前月6月15日同女の希望があって始めたとあるが、財政的にも学習の場も指導陣の確保も見通しがつき、生徒募集に踏み切ったのではないだろうか。9月までに更に男子2名の入学があり、生徒数は3名となった。これは東海訓盲院予備科と仮称されるものである。その後、日本報徳社の岡田良一郎氏その他の賛助も取り付け、同年12月10日に東海訓盲院慈善会が組織され、31年の1月に小笠郡西南郷村南西郷に借家を確保して寄宿舍とした。（創立90年記念誌に西郷村とあるは誤り）

同月24日に松井豊吉、飯塚仙太郎両氏の連名で県知事に東海訓盲院設立書を提出した。教室として掛川町紺屋町の広楽寺を借り、教師として東京盲啞学校卒業生佐々木吉太郎氏（技芸科担当）、江塚咲太郎氏（普通科担当）を迎え、女生徒2名を加えて3月2日の認可を得て本県下初の盲教育機関が発足したのである。

更に5名の新入生を迎え初年度14名の生徒を数えるに至った。当時は普通科と技芸科の共に3年制の2科があり、後者では職業教育が行われたが、両科を併せ履修することが出来たので、多くの生徒が両科に籍をおいていた。なお、盲学

校への就学義務化は第2次世界大戦の後であるので、当時は希望者のみ入学した。1ヶ月の授業料は30銭、寄宿舎は4円の支払いを要した。現在に換算すると授業料2500円、寄宿料32000円程度と推定されるが、貧困のため子供の時から働かざるを得ない家庭にあっては、就学は困難であったと思われる。ちなみに当時の按摩の免許は徒弟制度によっても取得出来たので、一定期間徒弟として無給で勤められれば、学歴不要で免許を取得、開業は出来たのである。

最初の院長は小田信樹氏で、松井氏はもっぱら慈善会の維持のために活動をしていた。しかし明治34年4月21日に至り、突然訓盲院を引退してしまう。東海訓盲院設立時創立委員20名、及びその他の役員の名簿の中に飯塚仙太郎氏の名前はあるが、肝心の松井豊吉氏の名前が無い。33年の役員改選時も同様であることは不可解な事実である。

しかし大正9年9月に静岡市に移転した静岡盲啞学校に理事として迎えられている。この間の事情も定かでない。

小杉 あさ

「小杉先生」というと年輩の人は小杉あさ先生、比較的若い人は小杉茂作先生を思い出すようだ。あさ氏は視覚障害者教育ばかりでなく、視覚障害者全般の福祉にも大いに貢献されたことに異論をはさむ人はいないだろう。しかし、時が経つにつれ事実とは違うことが流布されている。例えば「静岡盲学校の前身の東海訓盲院の創始者」という紹介が最近見られるが、これは間違いである。あさ先生についての伝記、研究の中で静岡県立大学の名誉教授、美尾浩子先生の著作になる「六枚の肖像画」は文学的に見ても優れたものであると思う。静岡新聞社刊だが、著者は早世され現在は絶版になっている。点訳したものを、この記念誌CDに添付したので参考にされたい。



生まれたのは明治14年(1881年)4月29日で、父は吉平(きちへい)、場所は静岡県浜名郡竜地村高園、現在は浜松市浜北区に属している。同地は1876年まで一時的に浜松県であった。小学校入学は我が国で就学が義務化された1886年の直後である。生家は職人を数人雇って神棚、神器などを作っている

比較的裕福な家庭であったので就学が可能であったのだろう。その年の就学率は僅かに30数%に止まっていたのである。

小学校卒業後、和裁塾に通い生家の職人の着物も製作できるようになっていたが、14歳のとき麻疹のために右眼に障害を来し、3年後は失明するに至った。

このような状態では和裁は無理と考え、助産婦の道に転身することになる。しかし左眼の視力も衰え始め20歳の誕生日には、完全に失明、助産婦の道も絶たれることになる。当時を回想して創立60周年記念誌では、次のように回想されている。

「(前略)5月10日に眼科医院を退院してから1ヶ月程の悲しみと、もだえは今思い出しても身の毛がよだつ。明けても暮れても、死ぬ事ばかり心身を勞した。家族の心労などものともしない程の大不幸な幾日かを過ごした。或る晩、両親は私のあやしげな気配に打驚き、涙ながらに「死という事は断然思い切り、どうか生きるという明るい心を取り戻してくれ」と、懇々とさとされたので、私は決然としてこれまでの不幸悲惨な気持ちを打ち切り、憤然と生き抜く覚悟を固めた。(後略)」

東海訓盲院に入学を希望したのは、明治34年6月20日で当時、東海訓盲院は既に広楽寺より離れ、元取引所を経て創立時の寄宿舍で授業も行っていた。明治34年1月は寄宿舍に隣接して新校舎が完成し、同年4月には第1回の卒業式が行われている。創立60周年記念誌には、普通科の卒業者に小杉あさの名前が記載されているが、これは誤りであろう。正確な卒業は明治36年3月28日、

東海訓盲院時代の生徒・教職員
添書には明治三六年以前とある
(後列左から二番目が小杉あさ氏)



技芸科第3期生である。これは静岡盲学校同窓会会員名簿で確認した。

この月には創立者の一人、松井豊吉氏が東海訓盲院を辞職し、中央では東京盲啞学校が教員練習科を開設し、我が国初の特殊教育教員養成を始めている。卒業後、母校の助教として教鞭を取るようになるが、翌37年春、日露戦争が勃発、寄付金は減少して技芸科担当はあさ氏一人になった。明治40年になり、教員練習科に入学、1年の課程を終了して正規の教員として母校に復職した。給料の月額4円で寄宿舍の支払いに全額あて、その他の生活費は実家より50銭の仕送りを受けて賄ったとある。現在の4000円前後の金額である。

東海訓盲院の経営危機は大正6年初めの静岡市移転まで続くのであるが、普通科の榛葉政吉氏と、あさ両氏の私財を投じての奮闘があって、かろうじて経営が維持出来たのである。

この間、小杉あさ氏は東京盲学校長小西信八(のぶはち)氏、静岡師範学校長、星菊太氏などに援助を要請し、快諾した両氏、また静岡市の有力者、原崎源作氏などの強力な応援もあり、ひとまず経営危機を乗り越えた。更に掛川在の鈴木あぶ氏の資金的な援助もあり、大正6年1月15日に安倍郡安東村北安東(現在の静岡市葵区)熊野神社前に移転することが出来た。熊野神社は現存するが、以前の社域は現在の数倍あったことが、安倍郡誌に記載されている。また訓盲院の存在を熊野神社、及び近隣の住人に尋ねてみたが、全く手がかりは得られなかった。また前記の美尾浩子氏の住居が至近距離にあったのは、不思議な因縁である。

同年5月28日に私立静岡盲啞学校と改称、6月25日に啞生部を併置した。この日は県立静岡聾学校の創立記念日となっている。この時は前静岡城内小学校校長綾部関氏を校長とし、新たに啞生部教員として石井勇氏を迎えた。

大正7年10月23日静岡市二番町36に校舎兼寄宿舍が竣工され、移転した。大正11年に二番町23に聾啞部の教室が出来、場所的には盲聾の分離をみたが、制度的に別れたのは翌年で私立静岡盲学校と私立静岡聾学校が設立された。

視覚障害者と聴覚障害者の間ではコミュニケーションが非常に取りにくい。両者を同一教室で教育したことは無かったと思うが、両者の分離は当事者の強い希望であったので分離は歓迎された。しかし、私立の経営には両校とも限界に達し、昭和8年に至り静岡県に移管されることになった。ところが、実現したのは両校合併の静岡県立静岡盲啞学校だったのである。

翌9年4月より制度的にも静岡県立静岡盲学校と静岡県立静岡聾唖学校に分離した。

あさ氏の功績の中に盲聾教育の分離に貢献したことがあるが、大きな働きをしたのはこの時期であることが手記により判明した。あさ氏は小西信八氏の紹介により、上京して文部省初等教育局長に会い分離を陳情、元県知事、当時貴族院議員の赤池濃氏の当時の知事田中氏に対する助言と相まって、早々に両校の独立に漕ぎ着けたのである。

当時は校内においては、女子教員がいわゆる管理職につくことはほとんど無い時代であったろうし、現在においても校長の職にある者でも、あさ氏のような経緯で成果をあげることは困難であろう。この実現の元は、あさ氏が当時の要職にある方々との密な人脈を持っていたからに違いない。時代は変わり社会的背景、教育の基本的な考え方も変化した。現在、静岡盲学校の敷地内には盲学校、聾学校共生の寄宿舍がある。

また、平成19年度より障害者の関係の学校は全て特別支援学校に変わった。「盲学校」「聾学校」「養護学校」の名称も消滅しつつある。あさ氏が健在であれば、どのような感想をもらされるのであろうか。

両校は昭和12年10月に現在地に移転、落成式は11月23日に両校に時差を付け聾唖学校は先に盲学校は後に行われた。

時代を戻すと、大正12年になり、あさ氏は長姉の娘（あさ氏には姪）と同居するようになった。父の吉平氏、長兄の安平氏が身内の者であさ氏を支えようと配慮したためと伝えられている。姪は地元の女学校を卒業後、静岡市に移り叔母の世話と平行して静岡女子師範学校第2部に通学、大正14年に卒業した。後に小杉家に入籍するが、同校同窓会木蘭会の名簿によると、当時は古木きく雄の名前のままであったことが分かる。当時、学校は浅間神社前にあったことは、今では知る人は少ない。

あさ氏は昭和11年に退職、以降昭和20年まで嘱託教授として勤務した。昭和15年には2600円を寄付して奉安殿を建設した。奉安殿とは天皇陛下の教育勅語、ご真影（写真）を納めた建物で全国の学校に設置されたが、校舎内にあるものと、外に建てられたものがあり、あさ氏の場合は後者に当たる。あさ氏宅には非常に状態の良い写真が2枚保存されている。これは昭和20年6月19日の静岡大空襲では消失を免れたが、同年11月20日の不審火による校舎焼失の

際、消滅した。しかし終戦後のこととて進駐軍（後の占領軍）の方針により、早晩撤去は免れなかったようだ。

小杉あさ氏により
建設された奉安殿



奉安殿
焼失前の校舎を背景に

退職後、昭和24年に静岡県中部盲人協会、翌25年の静岡県盲人連合会の結成に尽力し、共に初代会長に就任している。

活動拠点としての盲人会館の建設にも精力的に関わり、「愛の鉛筆運動」を主導して利益をあげ、昭和28年に静岡市春日町に落成をみた。

惜しむらくは資金不足のためか、単独の建物とはならず、「静岡県身体障害者更生指導所」と「静岡県盲人福祉会館」の併設となった。

あさ氏は治療師の養成にも努め、一時は数名の弟子を自宅におき、指導した時期もあった。最後は、浜松盲学校卒業の鈴木静穂さん1名にしぼっていた。あさ氏は天皇陛下、県知事、徳富蘇峰などの著名人の治療に



当たり、その技術は相当信頼されていたようだ。経歴からみると特定の師匠の技術を伝承したのではなく、既存の体系に独自の工夫を加味した「小杉流」を確立していたのではないだろうか。

あさ氏は昭和44年1月16日、静かに息を引き取られた。老衰ということであるが、脳の老化ということは見られず、意識ははっきりされていたという。

勲五等瑞宝章、藍綬褒章も受章され視覚障害者の教育、福祉に一生を捧げられた輝かしい生涯であった。

小杉 茂作(もさく)

小杉あさ先生には筆者は約12年間、警咳に接する機会はあったものの、雲の上のような存在で、対話をしていただいた記憶は無い。茂作先生は静岡盲学校の校長の中でも際だった存在で、正に「大校長」なる肩書きが相応しい。視覚障害者教育のベテランであるのは言うまでもないが、芸術的にも優れた才能の持ち主で、多くの書画が現存する。書は枯れた筆致で絵画は写実的、水彩が多いと思うが人柄を偲ばせるほどのぼのとした作品が多い。



小杉茂作・きく雄夫妻

先生は伊豆大仁の農家、菅沼家の三男坊として生まれた。昭和4年静岡師範学校専攻科卒業後は静岡市内の小学校に奉職したと思われるが、あさ氏の姪のきく雄氏の勤務先の校長の仲介で昭和6年きく雄氏と結婚することになった。ご夫妻は同時にあさ氏の小杉家に入籍したのか、きく雄氏が先だったか不明であるが、この時から小杉姓を名乗るようになった。

昭和10年に至って義母と同じ教育の道に転身することを決意、退職または休職して東京盲学校師範科に入学した。このとき、きく雄氏も同行された。したがって、あさ氏の世話は交代して安平氏の娘が行うようになった。

師範科の修業年限は1カ年以下だと思われるが、修業後に静岡盲学校に空席が無く新潟盲学校に赴任することになった。しかし第2次世界大戦が激化してきた昭和18年に静岡盲学校に復職が叶い一男、三女の子供たちと共に一家は、あさ氏の元に帰ることが出来た。



石坂校長時代の教員・生徒
(前列右から三番目に小杉あさ氏、
その左隣中央の男性が石坂校長)

昭和20年、当時の校長の石坂氏が病没したことで、学期途中の10月19日に校長に就任した。昭和12年に静岡盲学校が現在地に新築した日と全く同じであったのは不思議な偶然であった。

就任約1ヶ月後の11月20日に大事件が起こった。実習室から出火し、大いなる学習の成果を期待されて堂々完成し、静岡市大空襲にも難を逃れた校舎は講堂、奉安殿もろとも僅か10カ年の年月を経て灰燼に帰したのである。校長にとっても正に痛恨の極みであったろう。

当時は校舎が寄宿舍と少し離れた北側に2階建1棟のみあり、防火壁も機能したのか、寄宿舍は類焼を免れ、約3年間学業は寄宿生の居室を借りて進められた。

昭和23年には盲学校も就学が義務化され、小学部、中学部、高等部が設置された。同年11月25日創立50周年記念式を兼ねて新校舎の落成式が行われ、盲学校は新制度下で新たなスタートを切ることになった。

ここに昭和35年頃、当時の教頭清水先生になる叙勲の推薦状のコピーがあるが、小杉先生の人柄を的確に表現しているので抜粋して紹介することとする。

・盲教育の研究に於いては言をまたないが盲児指導の基礎を確立、特殊教具教材の考案製作も自ら鋸をとり触地図等も年と共にその数を増し、また人間教育者として愛盲の信念を以って職業教育振興に当たり有意な卒業生を幾多社会に輩出、在学当時はもとより卒業後も慈父として慕われている。

・勤務の精進は早朝より出勤、校舎内外の巡視はもとより、建物の釘1本窓ガラス1枚の故障にも安全教育上、自ら修理又紙屑一つでも我が手で拾い、環境の美化、清掃管理等に心を砕き、放課後は夜半までも校務処理に残留全身全霊これ学校の為に凝結、また一木一草の世話から更に特技の一つの絵筆にて数々の画類を生み、情操教育実践に寄与せる事など徹底せる教育的人生観と芳潤なる信仰的精神の表れである。

非常に温厚な人柄で部下を叱責されるようなことは、無かったように思う。ただし校務での会計の報告には、いちいち算盤をはじいて1円の違いも指摘されるなど、後輩職員にはきめ細かな厳しい指導をされていた。

昭和34年に至り浜松盲学校への転勤が発表され、職員一同大いに驚き、ほぼ全員が県当局に留任の陳情に出向いたこともあった。



小杉茂作先生の書画



浜松盲学校では昭和40年3月までの6年間勤務された。

定年退職後は静岡新聞社にしばらく籍をおかれ、また静岡盲学校の元職員、現職員の「廣楽会」の会長として視覚障害者教育の振興、静岡盲学校同窓会の点字生徒名簿作成など精力的に活動された。これらの功績により勲四等瑞宝章も叙勲された。

平成元年9月、前立腺の疾患が元でお亡くなりになった。

米山 昌央

1 最初の出会い

小田信樹に最初に出会ったのは静岡盲学校の会議室であった。静岡盲学校の会議室には今も歴代校長の写真がずらりと並んでいる。その一番最初の頭巾を被った人物こそが、東海訓盲院の第一代院長である小田信樹であった。

私は以前静岡盲学校に奉職した。そして、この写真と名前を見て、

「あ、これが段横地（現菊川町横地地区）の小田さんだ」

と直感した。早速、静岡盲学校記念誌を見てみると、会議室に掲げてあるのと同じ頭巾姿の小田信樹の写真が載っていた。横地村史にも同じ姿の写真を見つけた。

この直感は当たっていた。この頭巾の人が県立静岡盲学校の前身である東海訓盲院（掛川市紺屋町広楽寺）の初代院長であり、私の母校である横地小学校（現菊川町立横地小学校）の前身である横地校を作った人である。

お茶畑の丘陵地の中腹に私が通学した横地小学校がありました。当時も今とかわらず、各学年1学級の小規模校であった。

木造平屋の校舎はどことなく薄暗かったが、雑巾で良く磨き込まれていた床が光っていたのを今でも思い出される。

正門を入った所に高床式の職員室があり、反対側の校舎の奥の方の少し高まった所に築山があった。そこを、私たちは、「記念壇」とか、「小田さんの記念壇」と呼んでいた。

この松の木立ちの中に小田信樹の頌徳碑があった。とは言っても、その当時は、何の記念碑なのか私たちは全然関心を持たなかった。ただ誰からともなく、「横地の学校を作った人の記念碑だ」とか、「小田さんを祭ってあるんだ」ということを聞いていた。

「小田」と言う姓は、当時横地村には、小学校の運動場の横の、茶畑の仕事や、農耕に忙しい「小田さん」のお宅しか知らなかったから、「このお宅の祖先が小田信樹だ」と心の中で決め付けたり、「本当にこの家が祖先なんだろうか」とお宅を覗き込みながら疑ったりもしたことを覚えている。

このように、子供の頃から身近な所にいた小田信樹のことを、なぜもっと早くから詳しく知っていなかったのだろうか自分自身に腑甲斐無さを感じた。また、大人

も子供も小田信樹のことを話題にしていたことに思い当たらないのである。近所や子供会の小中学生に聞いても小田信樹の業績について指導を受けた記憶は無いようであった。

旧横地村（現菊川町横地地区）の人々は横地校（現菊川町立横地小学校）を卒業して成人となっているのである。その子供も横地小学校で学んでいるのである。この学校の創始者について理解を持つということは当たり前のことであり、また、広く周知せしめることは横地地区成人の務めでもあるだろう。また、静岡盲学校に奉職した者にとっては、ほっておけない気掛かりなことである。そこで、この紙面をお借りして私の郷土の偉人の業績について紹介させていただくことにする。

2 小田信樹について

小田氏は代々徳川の旗本であった。信樹の父は又蔵鉄斎といい、禄高は 800 俵で、幕府の御金奉行、御勘定吟味方などの重職についた人である。

二宮尊徳（1787～1856）、藤田東湖（1806～1855、幕末の思想家）とも親しくしており、水戸烈公（徳川斉昭の尊称、1800～1860、水戸藩主、弘道館の設立）からは御歌を頂く間柄であったという。

オランダが安政 2 年（1855 年）に幕府に献上した電信器の、取り扱いを習う係を勝海舟（1823～1899）と共に受けて、その報告文を残しているという（日本科学技術史大系）。また、この時の電信器は日本最初の電信器として、今、逓信博物館に保存されているという。

信樹はこの鉄斎の長男で、弘化元年（1844 年）に江戸に生まれた。幼名を英之助と言った。慶応 2 年（1866 年）父親が御役御免となったのにもなって、幕府の公用人となった。明治維新に際しては、山岡鉄舟（1836～1888 政治家、剣術家）と共に精鋭隊小頭となって活躍した。

明治元年（1868 年）には、江戸幕府の留守居番となり、明治 3 年には徳川に従って静岡に移り、静岡県大属（県治条例が定める県に置く役職）という職についた。

明治 4 年（1871 年）に廃藩置県が行われ、幕臣も禄を離れて浪人の身となったのであるが、その時、信樹も静岡県大属の職を辞し、禄高の代わりに与えられたのが、私達の横地の土地であったわけである。

こうして、小田信樹と横地（現菊川町横地）の縁が出来たのである。

今から 122 年前、信樹 27 歳の壮年であった。

この横地の地に落ち着くとすぐに、自分の屋敷の西（小字、尾瀬戸、現小田善男氏宅地）に「梨園義塾」という塾を開いて、地元の青年や子供に教育をすることを始めている。

明治6年の頃には、塾生は30人程いたようである。

明治6年（1872年）学制が公布され、各村々で学校を作る機運が生じた。

当時の村の指導者が、財政上の思惑から、また一方では小田信樹への配慮から、この「梨園義塾」と小学校の関係を第一に考えたことは想像に難くない。

小田も教育に深い関心があったため、この小学校問題は小田を軸にして動いたようである。

そして明治6年東横地（現菊川町東横地）、西横地（現菊川町西横地）、三沢（現菊川町三沢）の三村組合立の形で常泉寺（菊川町東境地1792-1番地、廃寺、家屋現存）を仮校舎として横地校を開校し、初代校長となった。

信樹29歳の時であった。

明治8年（1875年）に小田の私塾「梨園義塾」の所に横地校の新校舎を建てた。教室が32坪（106㎡）総建坪47坪（155㎡）であった。

その費用は三ヶ村の人々の寄付金514円25銭を10年がかりで拠出した。

その時の小田校長の給料が6円（小田はこれを以後ずっと寄付している）、一般訓導の給料が10円前後であったという。

この年の入学生は男子62人、女子10人である。

明治10年奈良野村（現菊川町奈良野）、土橋村（現菊川町土橋）からの要望を受けて、5ヶ村組合立となり横地学校（現菊川町立横地小学校）として独立した。

このようにして、横地小学校は小田信樹によって誕生したのである。

明治11年（1878年）信樹34歳。内務省に出仕することになり学校を退職したが、梨園義塾での教えを受けた塾生や出身者が、学校の授業生（補助教員）としていたために横地学校は小田とのつながりが強かった。

小田は、この後も学校に定期的に金品を寄贈するなどして横地学校の発展に力を尽くした。

その後、農務省に移り、ついで鳥取県、福島県などの官職を歴任し明治27年（1894年）50歳の時、官を辞して帰村している。

その間もずっと小田は、横地学校とのつながりを強く保ち続けた。

明治27年頃、新しい校舎の建築の話が持ち上がった。

これまでの校地は、西に丘陵地、前面に谷があって、拡張することは困難であっ

た。そのため、新しい校地を求めることになり、再び小田の協力を得て、東北約1町の地（現在の横地小学校の所、東横地 1886・1887 番地）に新築することになった。

帰村して2年後には城東郡（現小笠郡）の郡会議員となり、次いで郡参事会員となっている。

この郡会議員になったことが、他村に小田の人柄や働きが広く知られることになったのであろう。明治31年（1898年）現在の静岡県立静岡盲学校の前身である、掛川町広楽寺における東海訓盲院の第一代院長となる。

この東海訓盲院の発起人の一人である松井豊吉は県立掛川中学校を卒業後両眼失明の災いにあい、東京盲学校の聴講生となって勉学の後、手術によって一眼に光を得たが、失明当時の苦悩を思い、盲児に普通教育を施すことの必要を痛感して、同級生飯塚仙太郎（獣医、新聞販売業、当時町会議員）と共に東海訓盲院を起草した。

3月12日。春雨の降る、薄ら寒い朝であったという。

小田信樹院長の下、佐々木吉太郎鍼按科教師、江塚咲太郎普通科教師、紅林しかを含めて5人の生徒の開院式が午前10時に挙行された。

会衆約300人、この地方ではまれにみる盛況であったという。

なお、同年度中に新入生9人を迎えて、男子10人、女子4人、計14人の生徒をもって次第に学校としての内容を整えていった。

明治32年4月8日。小田信樹院長は飯塚仙太郎等の臨席のもとに第一回の修業式を行ったが、渋沢栄一男爵（1840～1931、実業家。第一国立銀行、王子製紙、大阪紡績等創立。渋沢財閥を形成）の懇望により北海道開拓事業に着手するため、この修業式を機会に東海訓盲院を辞職した。

飯塚副院長がこれを代理し、間もなくして、鈴木康平が院長に就任する。

明治34年4月1日に第一回卒業証書授与式が挙行され、紅林しかをはじめ開院年度の入学生や当院発展に尽力した小杉あさ（県立盲学校・第3代校長小杉茂作先生の義母）等の普通科生6人、鍼按科生6人が卒業している。

北海道十勝に渡った小田信樹は、移民四百余戸、耕地三千町歩に及ぶ経営に成功している。

明治43年（1910年）病を得て東京に戻り、東京医館で静養したが、その年5月29日この世を去った。67歳であった。

遺骨は帰村して、常泉寺に埋葬された。

今は廃寺となった常泉寺の墓地に小田信樹と夫人の墓標がポツンと立っている。

3 おわりに

これが、小田信樹と横地小学校及び静岡盲学校との関わりである。

城下町とか、古くから栄えた宿場町や港町などでは、盲人の活動も盛んでそれにまつわる話題も多いであろうが、そのような土地柄でない地方の一寒村である横地村にとっては、小田信樹の業績は私たちに誇りと、勇気と、親しみを与えてくれている。

横地の地を選び、私たちの祖先を「梨園義塾」や、「訓盲院」で育て、広く社会に貢献した後、帰村して夫人と共に眠る小田信樹は、今なお私たちの心の中に生きているのである。

(参考文献)

- | | |
|-----------|-------|
| 「盲啞のれいめい」 | 静岡盲学校 |
| 「60周年記念誌」 | 静岡盲学校 |
| 「六枚の肖像画」 | 美尾浩子著 |
| 「横地村史」 | |
| 「菊川町史」 | |

筆者は元静岡盲学校教諭、退職時は東部養護学校副校長。

文中、「菊川町」は現在「菊川市」。

東海訓盲院時代の職員と関係者

氏名	役職名	在職期間	在職年数	備考
松井 豊吉	発起人、創立者総代	M30.5 ~ M34.4.1	4年	
飯塚仙太郎	創立者総代	M30.5 ~ M33.2.	2年10ヶ月	
平尾 平十	創立委員、会計監査	M30.5 ~ M39.3.	約8年	
杉山東太郎	創立委員	M30.5 ~ M39.3.	約8年	
小田 信樹	院長創立委員	M30.12.15 ~ M32.4.	1年4ヶ月	
佐々木吉太郎	教員	M31.3.15 ~ M36.3.	5年	
江塚咲太郎	教員	M31.2.12 ~ M33.4.20	2年1ヶ月	
鈴木 康平	院長創立委員	M33.3.1 ~ M39.1.19	5年10ヶ月	
後藤 又十	教員	M33.4.1 ~ M36.4.	3年	
宮本 新蔵	事務員	M34.5.1 ~ M38	約4年	
石川 きく	教員	M34.10.30 ~ M36.3.	1年5ヶ月	卒業生
小杉 あさ	教員	M36.4.10 ~ S11.1.22	32年9ヶ月	卒業生 東盲卒
長岡 民衛	教員	M36.4.1 ~ M37.3.	1年	卒業生
原田幸太郎	教員	M37.3.31 ~ M38.3.31	1年	卒業生
榛葉 政吉	教育院長	M37.7.1 ~ T11.10.10	18年3ヶ月	
鈴木 信一	設立者、院長	M39.4.5 ~ M42.3.31	3年	
山崎 しん	教員	M37.1.20 ~ M39.11.8	2年10ヶ月	
菅沼 よし	教員	M40.4.1 ~ M41.7.	1年3ヶ月	卒業生
羽田 義晴	教員	M41.9.30 ~ M43.9.22	2年	東盲卒

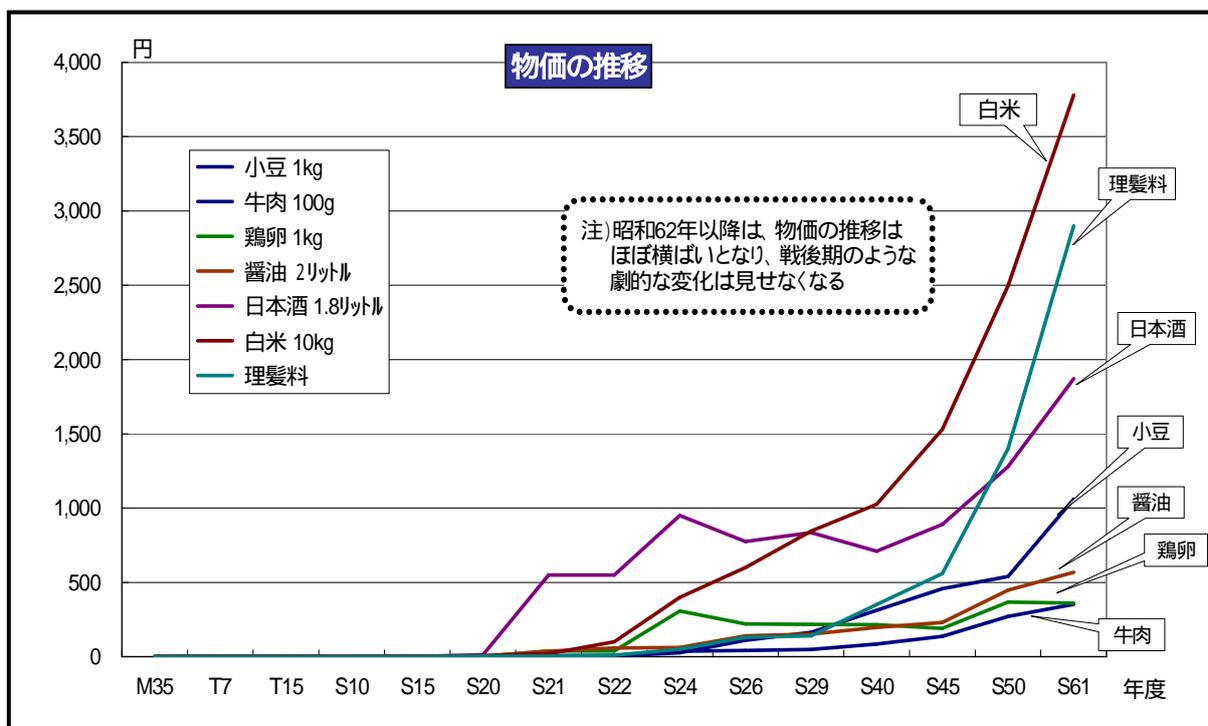
在職期間

氏名	役職名	明治														最終
		30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	
松井 豊吉	発起人、創立者総代	←	→													
飯塚仙太郎	創立者総代	←	→													
平尾 平十	創立委員、会計監査	←	→													
杉山東太郎	創立委員	←	→													
小田 信樹	院長創立委員	←	→													
佐々木吉太郎	教員		←	→												
江塚咲太郎	教員		←	→												
鈴木 康平	院長創立委員				←	→										
後藤 又十	教員				←	→										
宮本 新蔵	事務員					←	→									
石川 きく	教員					←	→									
小杉 あさ	教員															S11.1
長岡 民衛	教員							←	→							
原田幸太郎	教員								←	→						
榛葉 政吉	教育院長									←	→					T11.10
鈴木 信一	設立者、院長										←	→				
山崎 しん	教員								←	→						
菅沼 よし	教員											←	→			
羽田 義晴	教員													←	→	
教員数			2	2	2	3	3	3	4	3	3	4	3	3	2	→T5まで2

東海訓盲院 創立時から昭和までの物価の推移

(単位：円)

	M35	T7	T15	S10	S15	S20	S21	S22	S24	S26	S29	S40	S45	S50	S61
小豆 1kg	0.07	0.16	0.20	0.20	0.41	0.45	1.4	2.6	27.5	111	164	312	457	540	1060
牛肉 100g	0.07	0.14	0.40	0.40	0.45	0.80	6.0	8.8	37.0	42	48	86	137	271	353
鶏卵 1kg	0.38	0.96	1.09	0.53	1.11	3.80	38.4	39.1	308.0	220	217	216	190	367	361
醤油 2リットル	0.35	0.49	0.94	0.55	0.68	1.20	36.0	58.0	61.0	140	152	197	230	448	568
日本酒 1.8リットル	0.17	1.50	1.70	1.50	2.40	12.00	550.0	550.0	950.0	775	835	710	890	1280	1870
白米 10kg	1.19	3.86	3.20	2.50	3.25	6.00	19.5	99.7	400.0	600	845	1025	1530	2495	3780
理髪料	0.15	0.30	0.80	0.45	0.55	3.50	3.0	10.0	50.0	130	140	350	560	1400	2900
平均	0.34	1.06	1.19	0.88	1.26	3.96	93.5	109.7	261.9	288	343	414	571	972	1556



< 参考 >

明治35年を1とした場合の物価 (倍率)

	M35	T7	T15	S10	S15	S20	S21	S22	S24	S26	S29	S40	S45	S50	S61
小豆 1kg	1	2.3	2.9	2.9	5.9	6.4	20.3	37.1	393	1586	2343	4457	6529	7714	15143
牛肉 100g	1	2.0	5.7	5.7	6.4	11.4	85.7	125.7	529	600	686	1229	1957	3871	5043
鶏卵 1kg	1	2.5	2.9	1.4	2.9	10.0	101.1	102.9	811	579	571	568	500	966	950
醤油 2リットル	1	1.4	2.7	1.6	1.9	3.4	102.9	165.7	174	401	434	563	657	1280	1623
日本酒 1.8リットル	1	8.8	10.0	8.8	14.1	70.6	3235.3	3235.3	5588	4559	4912	4176	5235	7529	11000
白米 10kg	1	3.2	2.7	2.1	2.7	5.0	16.4	83.8	336	504	710	861	1286	2097	3176
理髪料	1	2.0	5.3	3.0	3.7	23.3	20.0	66.7	333	867	933	2333	3733	9333	19333
平均	1	3.2	4.6	3.6	5.4	18.6	511.7	545.3	1166	1299	1513	2027	2842	4684	8038

昭和61年を1とした場合の物価 (逆数)

	M35	T7	T15	S10	S15	S20	S21	S22	S24	S26	S29	S40	S45	S50	S61
小豆 1kg	15143	6625	5300	5300	2585	2356	746.5	407.7	38.5	9.5	6.5	3.4	2.32	1.96	1
牛肉 100g	5043	2521	883	883	784	441	58.8	40.1	9.5	8.4	7.4	4.1	2.58	1.30	1
鶏卵 1kg	950	376	331	681	325	95	9.4	9.2	1.2	1.6	1.7	1.7	1.90	0.98	1
醤油 2リットル	1623	1159	604	1033	835	473	15.8	9.8	9.3	4.0	3.7	2.9	2.47	1.27	1
日本酒 1.8リットル	11000	1247	1100	1247	779	156	3.4	3.4	2.0	2.4	2.2	2.6	2.10	1.46	1
白米 10kg	3176	979	1181	1512	1163	630	193.8	37.9	9.5	6.3	4.5	3.7	2.47	1.52	1
理髪料	19333	9667	3625	6444	5273	829	966.7	290.0	58.0	22.3	20.7	8.3	5.18	2.07	1
平均	8038	3225	1861	2443	1678	711	284.9	114.0	18.3	7.8	6.7	3.8	2.72	1.51	1

(4) 静岡盲学校の作品

全国高校生作文コンテスト
最優秀総理大臣賞受賞作品

私の人生設計

静岡盲学校高等部
本科二年 小原 浦子

人間の一生、それはこの長い長い地球の歴史において、ほんとうに短いものであり、人間もまた、ほんとうに小さな存在であると思う。しかし、私たちにとっては長い一本の道であり、また私たちも大きな一個の人間なのだ。

高村光太郎の詩に「道程」というのがある。

ぼくの前に道はない。

ぼくの後には道はできる。

人間の道、それは私たち自身が多くの人々の援助のもとに、自らの力で切り開いていくものなのだ。今までに、無限ともいえるほどの多くの人々がこの世に生をうけ、何年かの後、自分なりの一本の道を作りあげて、その一生を終えていった。しかし、よほど重大なことを成し得た人でない限り、その人の一生は、誰の心にも頭の片隅にさえも残らずに終わってしまうのだ。そう考えると、人生とはなんというはかない、むなしいものなのだろうかと思われてしまう。一生をまじめに努力の積み重ねによって生きた人も、社会のためには何の役にもたらず、ただ社会に迷惑をかけただけで一生を終える人も、結局は最後の「死」という運命だけはどうすることもできず、また死んでいく時は誰でもひとりぼっちなのだ。しかし私もこの世に生まれ、生きてゆく限りは、少しでも社会のために役だてる人間になりたいと思う。大きなことはできなくてもいい、人から喜んでもらえる人になりたい。そう思うのだ。

小学校五年生のとき、盲学校へ転校した私は、当時はまだ将来のことについてなど、あまり考えることもなかった。その私が、先生のおすすめや父母の希望で、「東京の盲学校へ進学してリハビリティションの資格をとり、将来は病院へ勤務してリハビリティションの仕事にたずさわりたい。」そんなことを考えるようになったのは、中学2年生の頃からだった。しかし、それはまったく抽象的な考えであり、具体的にはリハビリティションの持つ意義、仕事の内容などについては、あまり知らないという状態であった。広い世界にだけあこがれている私の考え方

は、はたして正しいのだろうか。私は迷い続けていた。「東盲へ行くのが、私にとって一番よい道なのだろうか。しかし、それは私の能力ではむりなのではないか。それならばいっそ、この学校の高等部を卒業して治療師となった方が……」。そんな不安定な気持のまま中学校生活最後の日々を送っていた私も、普通学校へ通っている同年の友人たちの希望に満ちた生活に、しだいにあせりを感じるようになっていた。友人たちは皆、進学、就職と自分の志望する道へと、一步ずつ歩み始めようとしていた。それなのに私は、自分の将来の進路にもまだ迷い続けている。しかし、私にはどうしてよいかわからず解決できないまま、時は流れ、あやふやな気持のまま本校の高等部へ進学した。

そこで、初めて理療科の授業を受けた私は、また先輩の話をきき実際に行なわれている治療を見て、今まで非科学的なものとしか考えなかった按摩、鍼きゅうが、西洋医学にも劣らない漢方医学のもとに行なわれるすばらしい治療であることを知ったのだった。そして私は、治療師という職業を通して社会に貢献していこう。それが私に与えられた人間として生きていく道ではないだろうか、もしそうならば、私は私なりのすばらしい一本の道を作りあげていこう。そう決心したのである。

私の父はマッサージ師として三十年もの間、多くの人々を治療してきた。そんな父の姿を小さな時から見て育った私も、まさか自分までがその職業につくとは夢にも考えていなかったし、私は父の職業がきらいであった。治療師が、盲人が社会的に一段低くみられていることを、おぼろげながら感じていたからかも知れない。しかし、今はもっと違ったみかたで、父をみているつもりである。そして私は、治療師という職業を通して、盲人の地位を高めていこうと考えている。盲人が一段低くみられているというのは、社会の人々の考え方が悪いのではなく、盲人にも責任があることなのだ。

今の世の中では、科学は急速に進歩している。医学にしてもまた同じことである。その中で盲人だけが、わずかの知識と技術に頼っていたら、社会から取り残されてしまっても、むしろ当然としか言いようがないと思う。これからの私たちは、旺盛な研究心と豊かな知識、高度の技術をもって治療にあたらねばならない。それと同時に、三十年来、父がどの患者にも同じようにもち続けてきた、苦しんでいる人を救ってあげよう、少しでも楽にしてあげたいという気持ちだけは、心の中にしっかりと刻み込んでおかななくてはならないと思う。

私は学校を卒業後、病院へ勤務して患者の治療にあたりたいと考えている。もちろん、成長するにしたい、女性としてのしあわせも考えるようになるだろうと思う。しかし私は、病院へ勤務することを、結婚までの腰かけとは考えたくはない。一人の治療師として純粋に患者の治療にあたりたいと思っている。

今までに多くの先輩が病院へ勤務し、活躍してきた。その人たちは皆、同じように話してくれる。「学校での基本は大切だ。しかし、実際の治療にはそれだけでは不十分だ。カルテひとつ読むにしても、最低、医学用語のドイツ語、英語だけは知っていなくてはならない。」と……。その言葉を聞いていると、たとえ東京へは行かなくても、リハビリテーションの資格は取らなくても、私にとってはこんなにも有意義な仕事があるのだ。だから、毎日毎日の勉強に努力していかなくてはと思うのだ。私たちが現在、学校で教えていただいているものは、実技にしても理論にしても、すべてが将来の仕事と関係してくるのだ。今日の勉強がもう明日へと密接につながってくるのだ。それゆえに、今日のこの一瞬を大切に生きていかなければならないのである。

私は、この夏休みに、生まれて初めて働くということを経験した。ちょっとした親せきの手伝いではあったが、普通の人たちといっしょに働いて、目が悪いからといって仕事に支障をきたすようなことは、決してなかったつもりだ。普通の人と対等の立場におかれた時、私は、もし仕事がうまくできなくても、目が悪いからなどという言いわけだけはしたくない。また、人からもそういうことで甘くみてもらうようなことも、決してないようにしたいと思い続けていた。それが今、私にとって大きな自信となってかえってきた。これから治療師として生活していく私にとって、大きな心の支えとなってくれるだろう。

私たちは、ごく狭い範囲内でしか、職業の選択が許されなかった。そして、私は治療師という職業を選んだ。将来、病院に勤めようと考えている。欧米諸国では按摩、鍼きゅうは、医師の手によって行なわれている。

私たちは大きな自信と誇りと、そして旺盛な研究心を持ち、身につけた豊かな知識、高度な技術によって社会に果たす役割の重大さを考えて、毎日毎日の勉強に努力していかなければならない。私は治療師として社会に貢献していきたい。そのためには、これからの毎日が、一步一步が私の人生を作りあげていく基盤となることを忘れずに、努力していこうと思うのである。

(編集注：昭和43年第2次佐藤栄作内閣の時代。筆者は現在、富山浦子さん)

静岡県立静岡盲学校応援歌

山崎 敏二 作詞
清水 一郎 作曲

明るく元気に

1 するがの うみ に あらわれ て
2 かんぶう はだ を さす と き もら
3 いまぞ し め さ ん わ が ち か ら

れ い ほ う ふ じ を あ お ぎ つ つ
え ん ね つ ほ ほ を こ が せ ど もし
ふる え わ が と も わ が せ ん し

は な た ち - ば な の か ぜ か お る -
え い か ん - め ざ し た だ い ち る -
せ い せ い ど う ど う ゆ く と こ る -

し ず お か の ち ぞ し わ が ぼ こん う し ず
きた え き た え し わ が せ こん しゅ し ず
え い か ん つ ね に わ れ に あ り

も - けん じ に さ か - え あ り ラ フ

レ フ レ フ レ フレ フレ フレ フレ フレ

1. 駿河の海に洗われて
霊峰富士を仰ぎつつ
花橘の風薫る
静岡の地ぞ我が母校
静盲健児に栄えあり
ラフレフレフレ
フレフレフレ
フレフレ

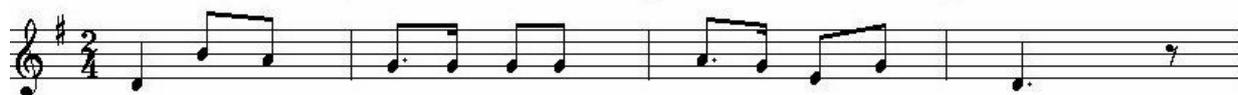
2. 寒風はだをさす時も
炎熱頬をこがせども
栄冠目指したて一路
鍛え鍛えし我が選手
静盲健児に栄えあり
ラフレフレフレ
フレフレフレ
フレフレ

3. 今ぞ示さん我が力
奮え我が友我が戦士
正々堂々ゆくところ
栄冠常に我れにあり
静盲健児に栄えあり
ラフレフレフレ
フレフレフレ
フレフレ

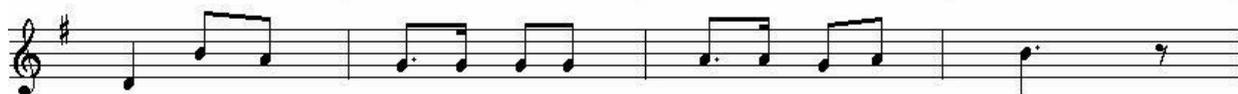
昭和27年10月12日 静岡に於ける
第25回全国盲学生体育大会に際して
作詞、作曲共に当時の静岡盲学校職員

静岡盲学校応援歌（はなさかじじいヴァージョン）

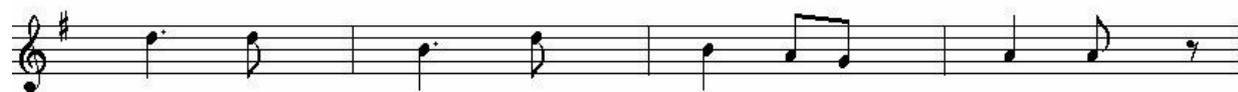
原曲 作曲 田村 虎蔵



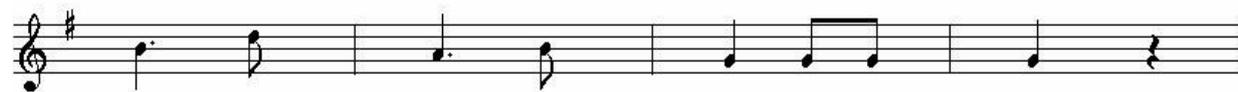
1 なかよ し ち - む は み な つ よ い
2 く ろ い せ ん し ゅ は み な つ よ い



1 し ず も う の せ ん し ゅ は な か が よ い
2 し ず も う の せ ん し ゅ は み な く ろ い



1 そ - れ で し ず - も う は
2 そ - れ で し ず - も う は



1 か ち か ち か っ ち か ち
2 か ち か ち か っ ち か ち

1. 仲良しチームは皆強い

静岡の選手は仲が良い

それで静岡は

勝ち勝ち勝っち勝ち

2. 黒い選手は皆強い

静岡の選手は皆黒い

それで静岡は

勝ち勝ち勝っち勝ち

3. 浅間神社に願かけて

お神籤引いて貰ったら

今度も静岡は

勝ち勝ち勝っち勝ち

静岡盲学校応援歌（春芳しきヴァージョン）



は る かん ば し き わ か く さ の



も える が ご と く そ だ ち ゆ く



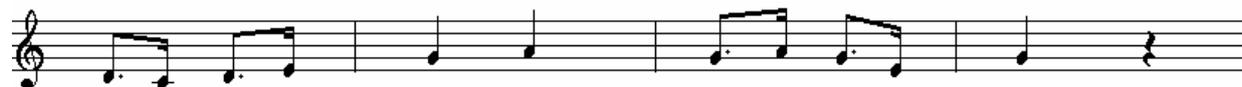
わ か き わ れ ら の ほ こ り と て



き た え - き た え し き み な る そ



せ い せ い どう - どう た た か い て



し ず も う の な を し ら し め よ



い ざ い ざ ふ - る え わ が せ ん し

春芳しき若草の

萌えるがごとく育ちゆく

若き我らのほこりとて

鍛え鍛えし君なるぞ

正正堂堂戦いて

静盲の名を知らしめよ

いざいざふるえ我が戦士

フレ、オー フレ、オー フレ、フレ、フレー

石川先生頌徳歌

作詞 末久 二男
作曲 島津 祐作

moderato

い る - は も じ さ ぐ り て ぞ よ む つ
む つ - の ほ し ゆ く て て ら し て わ

ぶ - ら な る む つ の し る し を あ -
け - い ら ん ぶ み の は や し も い -

み な せ る い し か わ の う し あ
と ぶ か く み ち か が や け り あ

あ と う と う し が い さ お し お
あ と う と う し が い さ お し よ

お い な - る わ ざ を あ お ぎ - て た
ろ ず よ - に く ち ぬ み わ ざ - と た

た え な ん そ の い さ お し を
た え な ん そ の い さ お し を

1. いろは文字さぐりてぞ読む
つぶらなる六つのしるしを
編みなせる石川の^{うし}大人
ああ尊と大人が勲おし
大いなる^{わざ}実績を仰ぎて
讃えなんその功おしを

2. 六つの星行く手照らして
分け入らん文の林も
いと深く道輝やけり
ああ尊と大人が勲おし
よろ^よず^よ代に朽ちぬ^み御^みわざを
讃えなんその功おしを

作詞...当時静岡県立浜松盲学校長
作曲...当時静岡県立浜松盲学校教諭

点字さん

作詞・作曲 清水 一郎

愉快地に

1 ぽつぽつ かみに てんをつ き
2 いちにい さんし- ご-ろく の

おもても うらも うつくし く
て-んを じょ-ずに くみあわ せ

と-りを そ-ろ-えて じがかけ- る
ど-んな こ-と-ばも すぐかけ- る

ほんとに うれしい てんじさ ん
ほんとに ゆかいな てんじさ ん

1. ポツポツ紙に点を突き
表も裏も美しく
通りを揃えて字が書ける
本当に嬉しい点字さん
2. 一, 二, 三, 四, 五, 六の
点を上手に組み合わせ
どんな言葉もすぐかける
本当に愉快的点字さん
3. 定規に点筆点字板
みんな楽しく手をつなぎ
一生懸命 お勉強
本当に仲よし点字さん
4. 思ったことや聞いたこと
忘れぬようにいつまでも
しっかり書いて置かれます
本当に有難う点字さん
5. 毎日学校の勉強も
点字のご本を皆読んで
立派な人になりましょう
本当に大事な点字さん

昭和17年3月3日神奈川県立平塚盲学校にて
小学部2年児童劇「点字さん」主題歌

編集後記

平成20年は静岡盲学校創立110周年、静岡点訳奉仕の会発足45年となる年です。盲学校はちょうど10年毎の節目の年ですが、本会は40周年と50周年の中間の段階にあります。月日の経つのは早いものですが、40周年記念はつい先頃行われたような感もあります。

しかし何についても言えることですが、歴史の痕跡というものは年月の経過と共に失われこそすれ、増えることはありません。今後5年、10年後では収集が困難になるものもあるだろうということで、資料集めを中心に記念誌を発行することになりました。なお、本会の活動の拠点である静岡盲学校の記録も第2部として特集しました。

新訳聖書に「叩けよさらば開かれん」ということばがありますが、編集の趣旨に賛同された多くの方々の御助力で、当初考えられなかった内容の濃い編集が出来たと感じています。

静岡盲学校の歴史の中でも、埋没されて日の目を見なかった貴重な資料も見つかりました。それらの中で静岡盲学校の発祥の元となった廣楽寺が1200年以上前に現在の牧之原市に建立され、その跡地が特定され、訪ねることが出来たと言うことと、1937年にヘレン・ケラー女史が本校を訪問された際の鮮明な写真の発見という2つの事実は特筆すべきものと思います。

編集中には予想出来なかったことですが、平成20年度、本誌が発行される時点では、静岡盲学校という校名は消滅し、静岡視覚特別支援学校になりました。ただし、「静岡県立静岡盲学校」と言う校名は昭和9年に制定されていますので、73年が経過したことになります。円周率を3.14にする、台形の面積を加えるなどという指導内容の復活もありますが、教育環境も指導方針も更に変わっていくことが予想されます。しかし、児童、生徒を含む視覚障害者の支援という本会が行ってきたことは、今後とも長く必要とされることでしょう。

本会創立50周年には、更に奉仕の内容が充実され、今以上に活発な会の姿を期待して編集後記とします。

平成20年5月

編集委員一同